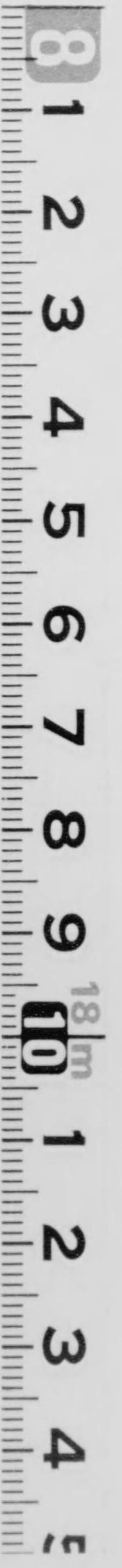


364
267



始



陸軍省檢閱濟

木
工
教
程

364-267

陸普第二五二二號

木工教程規定ノ件達

木工教程別冊ノ通定ム

大正六年八月一日

陸軍大臣 大島

陸軍 一 般

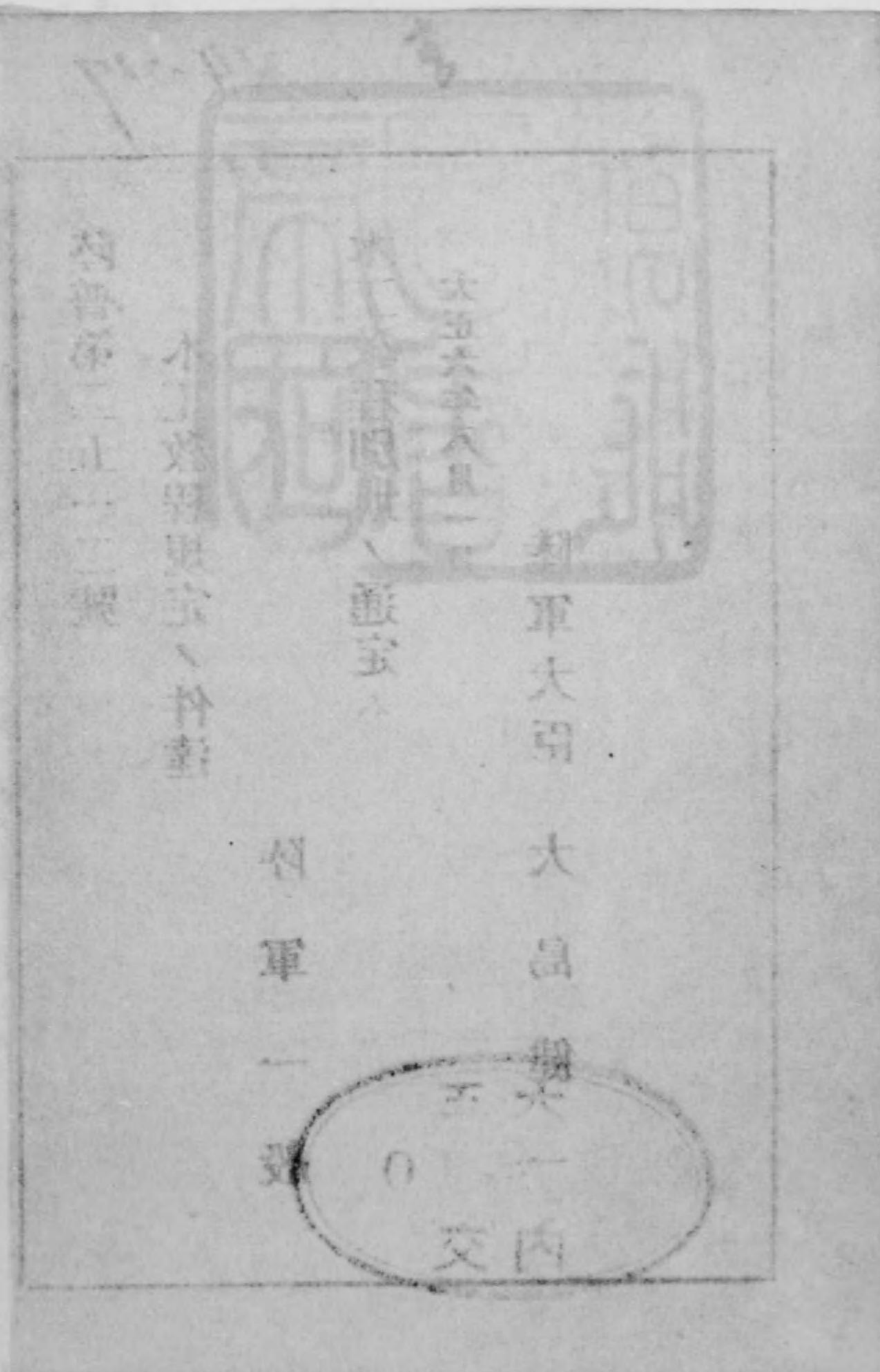
大正 6-9-10 内交

木工教程目次

總則	一
第一篇 工具	五
第一章 通則	五
第二章 測度器類	六
一 遊標尺	六
二 曲尺	七
三 卷尺	十
四 兩脚規	十一

目次

一



第三章 木工具類

一 縱 鋸	十一
二 橫 鋸	十三
三 廻 鋸	十三
四 畔 鋸	十四
五 押 鋸	十五
六 道透鋸	十五
七 臺挽鋸	十五
八 木挽鋸	十六
九 船工鋸	十六

十 摺合鋸	十七
十一 八目振、木挽目振	十七
十二 平 鑿	十八
十三 厚 鑿	十八
十四 鋸 鑿	十九
十五 船工鋸鑿	十九
十六 押 鑿	二十
十七 內圓鑿	二十
十八 外圓鑿	二十一
十九 橫筋鑿	二十一

二十	荒鉋、中鉋、仕上鉋	二十一
二十一	溝鉋	二十三
二十二	側鉋	二十四
二十三	外圓鉋	二十五
二十四	弧鉋	二十五
二十五	際鉋	二十五
二十六	一寸四分反臺鉋	二十六
二十七	內圓鉋、六分棒鉋	二十六
二十八	臺直鉋	二十七
二十九	鉞	二十七

三十	墨壺	二十八
三十一	墨指	二十九
三十二	罽引	二十九
三十三	轉柄	三十
三十四	轉柄匙錐	三十
三十五	轉柄三齒錐	三十一
三十六	轉柄菊錐	三十一
三十七	目立鑢	三十一
三十八	雁木鑢、木鑢	三十二
三十九	三目錐、四目錐	三十三

四十	角刃螺錐	三十四
四十一	圓刃螺錐	三十四
四十二	木工臺	三十五
第四章	一般工具類	三十五
一	柄附螺廻、轉柄螺廻	三十六
二	小自在螺鑰	三十六
第五章	砥類	三十七
一	荒砥	三十七
二	青砥	三十七
三	合砥	三十八

四	鋼砥	三十八
第六章	檢查	三十九
第二篇	材料	四十三
第一章	木材	四十三
一	檜	四十三
二	樺	四十三
三	鹽地	四十四
四	檜	四十四
五	杉	四十五
六	樅	四十五

七	松	四十六
八	櫻	四十六
九	山毛櫸	四十七
十	朴	四十七
十一	白楊	四十八
十二	胡桃	四十八
十三	棕	四十九
十四	木材ノ鑑別	四十九
第二章	糊類	五十一
一	膠	五十一

二	蕨糊	五十二
第三章	塗抹材料	五十二
一	上塗塗料	五十三
二	下塗塗料	五十三
三	漆	五十四
四	假漆	五十五
イ	酒精製假漆(「ペルニー」)	五十五
ロ	油製假漆	五十六
ハ	「テレピン」油製假漆	五十六
第四章	脂油其ノ他	五十七

一	格納用礮油	五十七
二	「ワセリン」	五十八
三	「パラフィン」	五十八
四	常用礮油	五十九
五	鯨油	五十九
六	牛脂	五十九
七	「テレピン」油	六十
八	石油	六十
九	揮發油	六十一
十	生(煮)亞麻仁油	六十二

十一	「クレオソート」油	六十三
十二	「ナフタリン」	六十三
十三	炭酸曹達(洗濯曹達)	六十四
十四	苛性曹達	六十四
第三篇 作業		
第一章 基本作業		
一	通則	六十七
二	木材ノ挽切法	六十八
三	木材ノ鉋削法	六十九
四	穿孔法	七十二

五 接合法	七十四
六 切組法	七十五
七 打釘法	七十七
八 墨掛木取法	七十九
イ 柄類	七十九
ロ 箱類	八十
九 塗抹法、剝脫法	八十一
イ 上塗塗料及下塗塗料ノ塗抹法	八十一
ロ 上塗塗料及下塗塗料ノ剝脫法	八十三
十八 假漆ノ塗抹及剝脫法	八十五

第二章 修理作業

一 通入則	八十六
二 三十年式銃劍及三十二年式軍刀	八十八
三 鞍骨類	八十九
四 箱類	九十
五 柄類	九十一
六 演習用架橋器材冠材及負桁材	九十二
七 輜重車	九十二
第四篇 圖面ノ見解	九十五
第一章 圖面及線	九十五

第二章 註記	九十六
第三章 見解上ノ注意	九十八
第五篇 兵器保存法	九十九
第一章 手入	九十九
一 金屬部	九十九
二 革具	百二
三 麻製品及毛類	百七
四 木部	百八
五 手入上ノ注意	百十
第二章 格納	百十一

第三章 分解及結合	百十五
-----------	-----

木工教程目次 終

木工教程

總則

第一 本教程ハ陸軍工卒教育規則ニ據リ軍隊ニ於テ木工卒ノ教育ヲ行フニ方リ實施スヘキ一般ノ標準ヲ示シ工卒教育ノ齊一進歩ヲ期スルヲ以テ目的トス

第二 本教程ハ主トシテ木工ニ關スル各兵科共通ノ事項ヲ記述シ其ノ一兵科ニ關スル事項ハ單ニ主要ナルモノヲ例記セルニ止ム而シテ各隊ハ教育ノ實施ニ方リ所屬工卒ノ種別竝保管兵

器ノ種類ニ應シ其ノ教育スヘキ事項ヲ適宜斟酌スヘキモノトス
第二 工卒ノ教育ハ實技ニ重キヲ置キ學科ハ勉メテ術科ト併セ行フヘキモノトス又兵器ニ對スル尊重心ヲ養成スルハ兵器ノ保存並修理作業ヲ完全ナラシムル爲最緊要ナルヲ以テ之カ涵養ニ意ヲ用ウルヲ要ス

第四 工卒ノ任務ハ主トシテ兵器ノ修理ニ從事スルニ在リ而シテ技術ノ巧拙及作業ノ精粗ハ兵器ノ價值ニ影響スルコト大ナルヲ以テ常ニ技術ヲ練磨シ且作業ノ正確ヲ期セサルヘカラス
第五 工場ノ軍紀ハ作業ノ性質上動モスレハ弛緩ニ陥リ易シ故ニ作業ノ指導監督ニ任スル者ハ勿論各工卒ハ常ニ作業軍紀

ノ緊張ニ遺憾ナキヲ期セサルヘカラス
作業軍紀トハ如何ナル場合ヲ問ハス作業間命令ヲ確實ニ實行シ作業ニ關スル諸規定ヲ嚴守スルヲ謂フ

第六 工具ノ整否ハ作業ノ成果ニ大ナル關係アルヲ以テ常ニ其ノ整備ヲ怠ルヘカラス之カ爲屢工具ヲ檢查シ適時研磨修正ヲ行ヒ使用終ラハ手入ノ後所定ノ位置ニ整頓スヘシ殊ニ共同使用ノモノニ在リテハ動モスレハ其ノ取扱粗雜ニ流レ易キヲ以テ一層注意スヘシ又工具ハ必ス其ノ用途ニ從ヒ之ヲ使用シ苟モ煩ヲ厭ヒテ其ノ使用ヲ誤ルカ如キコトアルヘカラス

第七 材料ハ其ノ目的ニ應シ必要ノモノヲ用キサルヘカラ

スト雖勉メラ之カ節約ヲ圖リ徒費廢棄ノ弊ニ陷ルコトナキヲ要ス

第八 修理品ハ其ノ取扱ヲ鄭重ニシ完成品ト未成品トニ區分シ品目毎ニ整置シ要スレハ手入ヲ行ヒ其ノ保存ヲ全カラシムヘシ

第一篇 工具

第一章 通則

第九 木工卒ノ用ウル工具ハ其ノ使途ニ依リ大別シテ屯營用木工具、携行木工具トシ其ノ他携行輜重車工具、修理所用諸工具竝砲臺用修理工具中ニモ木工ニ必要ナル工具ヲ收容セラル本篇ハ主トシテ屯營用木工具竝携行木工具中主要ナルモノニ就キ記述ス而シテ屯營用木工具中野戰職工具ノミニ屬スルモノハ(野)、工兵大隊演習器材ノミニ屬スルモノハ(工)ヲ各其ノ下

ニ記入シテ之ヲ區別ス

第二章 測度器類

一 遊標尺(野) (第一圖)

第十 寸度ヲ精密ニ測ルニ用ウ
桿ノ一面ニハ耗寸度、他面ニハ吋寸度(吋ノ八分ノ一迄ヲ現
ハス)ヲ刻ミ又遊標ノ一面ニハ一耗ノ十分ノ一、他面ニハ一吋
ノ六十四分ノ一迄ヲ測リ得ル如ク分畫ヲ刻メリ

使用法 啄被ヲ起シ駐螺ヲ緩メ遊標ヲ動カシテ下嘴ヲ適宜ニ開
キ物體ヲ兩嘴ノ間ニ挾ミ駐螺ヲ緊メ徐カニ物體ヨリ離シ遊標ノ

零位ニ對向スル桿ノ分畫ヲ讀ムヘシ若正シク對向セザルトキハ
少キ方ノ分畫ヲ讀ミ又一耗以下若ハ一吋ノ八分ノ一以下ハ桿ノ
分畫ト一致スル遊標ノ分畫ヲ讀ムモノトス
孔ノ徑ヲ測ルニハ兩嘴尖端ノ外側ヲ孔ノ内側ニ當テ又二點間ノ
距離ヲ測ルニハ兩嘴ノ尖端ヲ之ニ合セテ前ト同様ニ分畫ヲ讀ム
モノトス

使用後ハ遊標ノ零位ニ復シ輕ク駐螺ヲ緊メタル後啄被ヲ以テ嘴
尖部ヲ被ヒ置クヘシ

二 曲尺(第二圖)

第十一 寸度ヲ測リ線ヲ畫キ面ノ平坦或ハ直角ヲ檢シ其ノ

他斜面ノ勾配ヲ測リ若ハ之ヲ定ムル等ニ用ウ
 長手及横手ノ外縁ニハ角頂ヲ起點トシ一面ニハ曲尺寸度、他面
 ニハ耗寸度(此ノ兩寸度ヲ俗ニ表目ト謂フ)ヲ刻ミ又長手ノ内縁
 ニハ特別ノ分畫(俗ニ裏目ト謂フ)ヲ刻メリ
 使用法 寸度ヲ測ルニハ表目ヲ以テシ線ヲ畫クニハ縁ヲ定規ト
 ス
 面ノ平坦ヲ檢スルハ種種ノ方向ニ縁ヲ當テ透視シテ間隙ナキト
 キハ平坦ナリ又面ノ直角ヲ檢スルニハ隅角部ヲ當テ之ヲ透視ス
 ルモノトス
 斜面ノ勾配ヲ測ル方法ハ種種アルモ其ノ一例ヲ示セハ先ツ斜面

ノ縁ノ一點ニ長手ノ一尺ノ分畫ヲ合セ且之ヲ水平ナラシメタ
 ルトキ斜面ノ他ノ點ト合ヒタル横手ノ分畫寸度ヲ讀ムヘシ然ル
 トキハ水平一尺ニ對スル何寸上リナルカヲ知ルコトヲ得(甲圖)
 斜面ノ勾配ヲ定ムル方法亦種種アルモ其ノ一例ヲ示セハ勾配ノ
 起點ニ長手ノ一尺ノ點ヲ當テ起點ヲ通スル水平線上ニ所要ノ勾
 配ニ等シキ横手ノ寸度ノ分畫ヲ合セタル後長手ノ外縁ニ沿ヒ線
 ヲ畫クヘシ(乙圖)
 裏目ノ應用法概ネ左ノ如シ
 丸太材ヨリ取り得ヘキ角材ノ寸度ヲ知ルニハ其ノ直徑ヲ裏目ニ
 テ測ルヘシ然ルトキハ此ノ裏目寸度ハ角材一邊ノ寸度ヲ示ス

木材ノ外側縁ト四十五度ノ角ヲ成ス斜線例ヘハ矩形ニ接合スヘ
 キ合口アヒクテ(俗ニ留線ト謂フ)ヲ畫クニハ表目ニテ木材ノ幅ヲ測リ次
 ニ此ノ寸度ト同數ノ裏目寸度ヲ斜線ヲ畫カムトスル點ヨリ對邊
 上ニ測リ曲尺ニ準ヒテ線ヲ畫クヘシ(丙圖)

三 卷尺マキジャク(野)(第三圖)

第十二 長キ物體ノ寸度或ハ物體ノ外周ソトマハリヲ測ルニ用ウニ米
 卷尺及十米卷尺ノ二種アリ
 尺布サシヌノ一面ニハ曲尺寸度、他面ニハ耗寸度ヲ表ス
 使用法 尺布ヲ引出シ之ヲ物體ニ接シテ測ルモノトス使用後ハ
 轉把フシバヲ起シ之ヲ右ニ廻シテ尺布ヲ其ノ室ニ收ムヘシ

四、兩脚規リキウキヤクキ(野)

第十三 圓弧エンコヲ畫キ又ハ二點間ノ距離ヲ測リ或ハ之ヲ等分
 スル等ニ用ウ

使用上ノ注意 寸度ヲ定ムルニハ曲尺等ト併セ用キ又兩脚開閉
 ノ工合グアヒヲ調節スルニハ樞鉸フツツガヒノ緊定シメカダヲ加減スヘシ

第三章 木工具類

一 縱カタテ鋸ノコ(第四圖)

第十四 木材ヲ縱カタテニ挽切ヒキキルニ用ウ尺六縱鋸(工)(柄ノ取
 附部ヨリ鋸身ノ端末迄ノ長サ一尺六寸以下之ニ準フ)、尺三縱鋸

(工) 尺一縦鋸工及八寸縦鋸(野)ノ四種アリ
 鋸齒ハ上刃^{ウハバ}及下刃^{シタバ}ヨリ成リ齒振ヲ施セリ
 使用法 先ツ右手ニ柄ヲ握リ左拇指ノ爪ヲ墨線^{スミ}(挽切ラムトスル線)ニ添ヘ之ヲ準^{ナラヒ}トシ鋸ノ本身^{モトミ}ニテ淺ク挽込ミ次ニ左手ヲ前、右手ヲ後ロニシテ柄ヲ握リ右足ヲ後ロニ開キ成ルヘク鋸齒ノ全長ヲ用キテ挽切ルモノトス
 鋸ハ後方ニ引クトキノミ力ヲ加フヘシ若前方ニ推ストキ過度ニ力ヲ用ウレハ鋸身ヲ曲クルコトアリ又姿勢ハ常ニ正シク保チ顔ノ中心線ヲ墨線ニ一致セシムル如ク位置スヘシ否サレハ眞直ニ挽切ルコト能ハサルモノトス而シテ墨線ニ沿フテ挽クニハ少ク

モ其ノ線ノ半幅ヲ殘スコトニ注意スヘシ
 注意 使用中時鋸身及齒振ヲ檢シ要スレハ之ヲ修正シ若ハ目立鏝ニテ刃ヲ研クヘシ

二 横鋸(第五圖)

第十五 木材ヲ横ニ挽切ルニ用ウ尺三横鋸、尺一横鋸及八寸横鋸(野)ノ三種アリ
 鋸齒ハ上刃、下刃ノ外ニ上目^{ウヘメ}ヲ有シ僅ニ齒振ヲ施セリ
 使用法 縦鋸ニ準フ

三、廻鋸

第十六 板ヲ弧形ニ挽切り或ハ切抜ク等ニ用ウ八寸廻鋸及

五寸廻鋸（野）ノ二種アリ
 鋸身ハ細長クシテ末身ニ至ルニ從ヒ幅狹シ又鋸齒ハ上刃及下刃ヨリ成リ鋸身ニ對シ斜ニ目立シ其ノ齒尖ハ銳クシテ齒振ヲ施サス
 使用法 先ツ匙錐サシギリ又ハ螺錐ネジギリヲ以テ挽起シノ點ニ孔ヲ穿チ此ノ孔ニ鋸ノ末身ヲ入レ漸次深ク挽込ミ經始ニ準ヒテ挽切ルモノトス
 廻鋸ノ末身ハ折レ易キヲ以テ主トシテ中身ト本身トノ間ヲ使用スルコトニ注意スヘシ
 四 畔鋸ズベ（第六圖）
 第十七 主トシテ溝ヲ造ルニ方リ其ノ兩側ヲ挽クニ用ウ

鋸身ノ一縁ニハ縱挽齒、他縁ニハ橫挽齒ヲ刻ミ齒列ハ稍弧形ヲ成セリ

五 押鋸オシノコ（野）

第十八 小形ノ橫鋸ニシテ鉋ノ押オサヘ（鉋身ヲ插込ム溝）、箱ノ切組等ノ小細工ニ用ウ

六 道透鋸ダツスキノコ（工）

第十九 主トシテ柄ホツノ胴附マウツキヲ挽切ルニ用ウ

鋸身薄ク背鐵ハイテツヲ嵌ム

七 臺挽鋸ダイビキノコ（工）

第二十 大ナル木材ヲ橫ニ挽切ルニ用ウ

齒列ハ弧形ヲ爲シ鋸齒ハ三角形ニシテ兩端ニ撞木ヲ附ス
使用法 先ツ木材ヲ臺上ニ置キ二人相對シ各一端ノ撞木ヲ握リ
交互ニ推挽^{オシビキ}シツツ挽切ルモノトス

八 木挽鋸(工)

第二十一 大ナル木材ヲ縦ニ挽切ルニ用ウ
使用上ノ注意 木材ヲ挽切ルニハ要スレハ木挽鋸ヲ以テ之ヲ適
宜ノ支木ニ釘著シ又切口ニハ楔ヲ插入シ作業ノ進ムニ從ヒ逐次
之ヲ下ケテ挽切ヲ容易ニスヘシ

九 船工鋸(工)

第二十二 木舟ノ修理ニ用ウ船工縦鋸及船工横鋸ノ二種

アリ

十 摺合鋸(工)

第二十三 船板等ノ裝著ニ際シ二板ノ接合部ヲ摺合スニ
用ウ荒摺合鋸及細摺合鋸ノ二種アリ

十一 目振(第七圖)、木挽目振(工)

第二十四 鋸ニ齒振ヲ施シ或ハ之ヲ修正スルニ用ウ
目振ニハ縦溝三箇、木挽目振ニハ同一箇ヲ設ク
使用法 鋸齒ヲ上ニシ縦ニ齒列ヲ規ヒツツ目振ノ溝ヲ上方ヨリ
鋸齒ニ篋メ柄ヲ側方ニ傾ケテ所要ノ傾キヲ與フルモノトス
目振柄ノ他端ノ孔ハ目立鏢ヲ插込ムニ用ウ

十二 平鑿ヒラノミ

第二十五 木材ニ孔、溝ヲ穿ツトキ其ノ準ノ線ヲ切下ケ又ハ内面ヲ削リテ整へ若ハ切組部ヲ造ル等ニ用ウ一寸二分平鑿(工)、一寸平鑿、八分平鑿、六分平鑿、四分平鑿及二分平鑿(野)ノ六種アリ

使用法 左手ニテ柄ヲ握リグシノウニテ其ノ頭部ヲ打ツモノトス但シ輕ク使用スル場合ニハ右手ニ柄ヲ握リ左手ヲ刃尖ニ添へ手力ノミニテ削ルモノトス

十三 厚鑿アツノミ

第二十六 主トシテ木材ニ孔、溝ヲ粗鑿スルアラボリニ用ウ八分厚

鑿、六分厚鑿、四分厚鑿、二分半厚鑿(野)、二分厚鑿(工)及一分半厚鑿(野)ノ六種アリ

十四 鑿ツメノミ

第二十七 木材ニ深キ小孔ヲ穿ツニ用ウ

鑿身ハ細長クシテ鑿ヲ有ス
使用法 左手ニ柄ヲ握リ刃ヲ纖維ノ方向ト直角ニ立テ立翁ヲ以テ一、二回之ヲ打チ次ニ鑿ヲ打上ケテ之ヲ抜ク逐次此ノ如クシテ所要ノ孔ヲ穿ツモノトス

十五 船工鑿セシコウツメノミ(工)

第二十八 船釘ヲ打込ム孔ヲ穿ツニ用ウ船工直鑿スゲ及船工

反鋸鑿ノ二種アリ
使用上ノ注意 船工反鋸鑿ヲ用ウル場合ニハ豫メ上部接合板ノ釘孔部ヲ扇形ニ穿ツヘシ

十六 押鑿

第二十九 孔、溝或ハ切組部等ノ面ヲ整フルニ用ウ一寸四分押鑿(工)、三分押鑿(野)及一分押鑿(野)ノ三種アリ
此ノ鑿ハ柄頭ニ環(俗ニ冠ト謂フ)ヲ装セス通常手力ノミニテ用ウ

十七 内圓鑿(工)

第三十 木材ニ圓キ孔、溝ヲ穿チ或ハ稜角ヲ圓ク削ルニ用

ウ八分内圓鑿、六分内圓鑿及四分内圓鑿ノ三種アリ

十八 外圓鑿

第三十一 木材ニ圓キ孔、溝ヲ穿ツニ用ウ八分外圓鑿(工)、六分外圓鑿、四分外圓鑿及二分外圓鑿(野)ノ四種アリ

十九 槓筋鑿(工)

第三十二 船板ノ接合面等ニ槓筋ヲ填ムルニ用ウ直刃槓筋鑿、斜刃槓筋鑿及反刃槓筋鑿ノ三種アリ

二十 荒鉋、中鉋、仕上鉋

第三十三 荒鉋ハ木材ノ粗削ニ用キ、中鉋ハ荒鉋ニテ削リタル面ヲ平ニシ、仕上鉋ハ中鉋ニテ削リタル面ヲ平滑ナラシ

ムルニ用ウ
 荒鉋及中鉋ハ逆目ヲ防ク爲添刃ヲ附シ又刃口ハ荒鉋、中鉋、仕上鉋ノ順序ニ之ヲ狭クス
 使用法 左手ニテ鉋臺ノ頭部、右手ニテ其ノ中央ヲ握リ之ヲ木材ニ壓著ケ常ニ力ヲ一樣ニシテ前方ヨリ後方ニ真直ニ引クモノトス又左手ニテ木材ヲ支フルトキハ右手ノミニテ用ウ
 鉋身ヲ鉋臺ヨリ脱スニハ片手ニテ鉋身ト共ニ鉋臺ノ兩側ヲ握リ才槌、鐵鎚或ハ玄翁ニテ鉋臺頭部ヲ上方ノ稜角ニ近ク輕ク打ツモノトス

注意

- 一 添刃ノ刃尖ハ鉋身ノ刃尖ヨリ稍内方ニ在ラシムルモノトス
- 二 荒鉋ハ通常凹凸多キ面ヲ削ルモノナルヲ以テ其ノ臺面前、後兩端及刃口ノ後端ハ平坦ニシテ中間ハ少シク之ヲ凹マシ又中鉋ハ其ノ凹ヲ淺クシ仕上鉋ハ殆ト平坦ト爲スモノトス
- 三 一般ニ鉋ノ刃ハ適宜兩端ヲ斜ニ研落シアルヲ要ス

二十一 溝鉋(第八圖)

第二十四

小溝或ハ階段部ヲ作ルニ用ウ荒溝鉋及仕上溝

鉋ノ二種アリ

使用法 溝ヲ穿ツニハ木材面ニ野引ナイビキ又ハ墨壺スミツボニテ所要ノ幅ニ線ヲ畫キ通常溝ノ兩側トナルヘキ部分ヲ野引又ハ畔鋸ニテ切込ミ中間ヲ削ルモノトス

鉋臺ハ其ノ幅狭キ爲左右ニ傾キ易キヲ以テ最初ハ定規トナルヘキ適當ノ板ヲ鉋ノ左側面ニ當テ之ニ倚ラシムルヲ可トス

二十二 側鉋ソキ (第九圖)

第三十五 溝ノ側面ヲ削ルニ用ウ右側鉋及左側鉋ノ二種アリ

刃尖ノ右側ニ出ツルモノヲ右側鉋、左側ニ出ツルモノヲ左側鉋ト謂フ

使用上ノ注意 臺ノ下面ヲ溝ノ底ニ密著セシメ之ニ對シ直角ニ削ルコトニ注意スヘシ

二十三 外圓鉋ソトマルガンナ (第十圖)

第三十六 圓溝ヲ造リ又ハ圓筒ノ内面ヲ削ルニ用ウ一寸二分外圓鉋(野)、一寸外圓鉋(工)及八分外圓鉋(工)ノ三種アリ

刃尖及臺面ハ共ニ弧形ヲ成ス

二十四 弧鉋コ (野) (第十一圖)

第三十七 小形ノ外圓鉋ナリ

二十五 際鉋キハ (第十二圖)

第三十八

内隅角ウチガハノスミ（入隅イリスミ）ヲ正シク削ルニ用ウ右際鉋及

左際鉋ノ二種アリ

切刃ノ左方ニ出ツルモノヲ右際鉋、左方ニ出ツルモノヲ右際鉋ト謂フ

二十六 一寸四分反臺鉋ソリダイガンナ

第二十九

弧形ヲ成セル木材ノ内面ヲ削ルニ用ウ

臺面船底形フナゾコガタヲ成ス

二十七 内圓鉋ウチマルガンナ（工）、六分棒鉋ボウガンナ（野）（第十三圖）

第四十

丸棒ヲ削リ又ハ角材ノ稜角カドヲ圓ク削ルニ用ウ内圓

鉋ニハ一寸内圓鉋及八分内圓鉋ノ二種アリ

刃尖及臺面ハ共ニ弧形ヲ成ス

二十八 臺直鉋ダイナホシガンナ

第四十一

鉋ノ臺面ヲ修正スルニ用ウ

鉋身ハ殆ト直立ス

使用法 鉋臺ヲ横ニ削ルヘシ

二十九 鉋テラナ

第四十二

鉋削ノ準備トシテ材面ヲ略平坦ニシ或ハ木材

ヲ粗削スルニ用ウ

使用法 木材ヲ足ニテ押へ兩手ニ柄ノ端ヲ握リ肘ヒヂヲ體ヨリ甚シク離スコトナク適宜ノ高サニ振上ケ打込ヲ加減シテ削ルモノトス

注意 釘ハ楔ニ依リ柄ニ固定セラルルヲ以テ使用ノ際楔ノ
效力ヲ檢スヘシ

三十 墨 壺 (第十四圖)

第四十三 木材面ニ墨線ヲ打チ又ハ垂直ヲ檢スル場合等
ニ用ウ

使用法 線ヲ畫クニハ留針ニ壺絲ヲ一回卷附ケ之ヲ木材面ノ一
點ニ立テ絲ヲ繰出シテ他點トノ間ニ緊張シ中間適宜ノ所ヲ眞直
ニ撮上ケタル後之ヲ放ツモノトス
垂直ヲ檢スル場合ニハ絲ヲ適宜ニ伸ハシ墨壺ニ卷附ケテ之ヲ吊
下クルモノトス

使用後ハ其ノ都度絡車ヲ廻シテ壺絲ヲ收ムヘシ

三十一 墨 指 (野)

第四十四 木材面ニ線ヲ畫キ或ハ符號ヲ記ス等ニ用ウ

使用法 線ヲ畫クニハ扁平ナル一端ニ墨汁ヲ附ケ通常曲尺ト併
セ用キ又符號ヲ記スニハ他端ヲ用ウ

三十二 引 (第十五圖)

第四十五 木材ノ一邊ニ平行スル線ヲ畫キ或ハ軟ラカキ
薄板ヲ縦ニ割ルニ用ウ

使用法 平行線ヲ畫クニハ先ツ木材ノ側面ヲ平ニ削リテ定規臺
ノ準ノ面ヲ造リ次ニ刃尖ト定規臺トノ間ヲ所要ノ寸度ニ定メ楔

ヲ以テ横木ヲ緊メ定規臺ヲ準ノ面ニ沿ヒ輕ク數回前方ヨリ後方ニ引キ刃尖ヲ以テ線ヲ畫クモノトス

薄板ヲ割ルニハ前ト同方法ニ依リ兩面ヨリ切込ムヘシ

三十三 轉柄テンペイ (第十六圖)

第四十六

轉柄匙錐サシギリ、轉柄三齒錐ミツバギリ及轉柄菊錐等ヲ裝シテ

木材ニ孔ヲ穿チ或ハ轉柄螺廻ネジマハシヲ裝シテ木螺子ヲ著脱スルニ用ウ
使用法 先ツ所要ノ錐若ハ螺廻ヲ其ノ室ニ取附ケ左手ニテ柄ヲ握リ之ヲ體ニ當テテ壓著ケ右手ニテ把ヲ握リ之ヲ廻シテ錐ヲ推進メ若ハ木螺子ヲ著脱ス

三十四 轉柄匙錐テンペイサシギリ

第四十七

軟ラカキ木材ニ孔ヲ穿ツニ用ウ四分轉柄匙錐、

三分轉柄匙錐及二分轉柄匙錐ノ三種アリ

三十五 轉柄三齒錐テンペイミツバギリ

第四十八

木材ニ隱釘カクシメノ孔ヲ穿チ若ハ板ニ稍大ナル孔ヲ

穿ツニ用ウ一寸轉柄三齒錐、八分轉柄三齒錐、七分轉柄三齒錐、六分轉柄三齒錐及五分轉柄三齒錐ノ五種アリ

三十六 轉柄菊錐テンペイキクギリ

第四十九

皿揉サラモミ (沈頭木螺子ノ頭部ヲ容ルル孔ヲ穿ツヲ

謂フ)ヲ爲スニ用ウ

三十七 目立鋸メタテヤスリ

第五十 鋸ノ齒ヲ目立スルニ用ウ大目立鋸及小目立鋸ノ二種アリ
 使用法 鋸身ヲ適宜ノ臺ニ托シ先ツ鋸ノ全身ニ互リ僅ニ齒尖ヲ
 削リテ其ノ高サヲ揃へ要スレハ目振ニテ略齒振ヲ修正シタル後
 鋸ノ一端ヨリ逐次刃ヲ規定ノ角度ニ削ルモノトス而シテ刃ヲ削
 ルニハ縦鋸ニ在リテハ先ツ上刃若ハ下刃ノミヲ目立シ横鋸ニ在
 リテハ同シ方向ニ接スル上刃及下刃竝上目ヲ目立シ次ニ鋸身ヲ
 反對ニシ前ト同要領ニ依リ殘ノ刃ヲ目立シ更ニ目振ニテ正シク
 齒振ヲ揃フヘシ

三十八 雁木鋸カシギキスリ(野)、木鋸キキスリ

第五十一 鉋ノ使用不便ナル場所ニ用キ雁木鋸ハ平面部、

木鋸ハ曲面部ヲ削ルニ用ウ
 使用法 柄ノ端ヲ右手ノ掌ニ當ツル如ク握リ左手ヲ鋸ノ前端ニ
 添へ鋸ノ全長ニ互リ進退シ前方ニ進ムルトキノミ力ヲ加フルモ
 ノトス

三十九 三目鋸ミツメギリ、四目鋸

第五十二 小三目鋸ハ硬キ木材ニ金釘ヲ打込ムヘキ孔ヲ穿
 ツニ用ウ大通三目鋸オウドロウシ(工)及小通三目鋸ノ二種アリ
 四目鋸ハ軟ラカキ木材ニ木釘或ハ竹釘ヲ打込ムヘキ孔ヲ穿ツニ
 用ウ大通四目鋸(工)及小通四目鋸ノ二種アリ
 使用法 柄ヲ兩掌ノ間ニ挾ミテ反復眞直ニ揉下クヘシ

四十 角刃螺錐 (野) (第十七圖)

第五十三 木材ニ孔ヲ穿ツニ用ウ八分角刃螺錐、五分角刃螺錐及三分角刃螺錐ノ三種アリ

使用法 八分角刃螺錐及五分角刃螺錐ニハ大角刃螺錐柄、三分角刃螺錐ニハ小角刃螺錐柄ヲ裝シ柄ノ兩端ヲ壓下ケツツ右ニ廻スモノトス

四十一 圓刃螺錐 (工)

第五十四 角刃螺錐ト略同一ニシテ唯刃尖弧形ヲ成スヲ異リトス一寸一分圓刃螺錐、一寸圓刃螺錐、八分圓刃螺錐、七分圓刃螺錐、六分圓刃螺錐及五分圓刃螺錐ノ六種アリ

四十二 木工臺 (第十八圖)

第五十五 各種ノ木工作業ヲ爲スニ用ウ又木材ヲ削ル場合ニ於テ之ヲ定規ト爲シ材面ノ平坦ヲ檢シ或ハ臺側ヲ準ト爲シ木材ノ側面若ハ木口ヲ直角ニ削ルコトアリ

材面ノ平坦ヲ檢スルニハ之ヲ臺上ニ伏セ指頭ニテ所所ヲ壓ストキ良ク密接シテ動カサレハ平坦ナリ

注意 臺ノ表面ハ常ニ平坦ニシテ側面ハ之ト直角ナラシムルコトニ注意スヘシ

第四章 一般工具類

一 柄附螺廻、轉柄螺廻

第五十六

螺子ヲ螺著ケ或ハ離脱スニ用ウ柄附螺廻ニハ十一耗柄附螺廻、八耗柄附螺廻及五耗柄附螺廻ノ三種又轉柄螺廻ニハ十一耗轉柄螺廻及八耗轉柄螺廻ノ二種アリ
使用上ノ注意 螺廻ヲ用ウルニハ螺子ノ溝ニ適スルモノヲ選ヒ其ノ端ヲ正シク溝ニ嵌メ且眞直ニ保チ稍壓著ケツツ廻スコトニ注意スヘシ否サレハ螺廻ノ端脱レテ溝或ハ他ノ部分ヲ傷ツクルコトアリ

二 小自在螺鑰(野)(第十九圖)

第五十七

牝螺或ハ螺桿ヲ螺著ケ或ハ離脱スニ用ウ

使用法 先ツ指頭ニテ螺機ヲ左ニ廻シテ顎ヲ適宜ニ開キ牝螺或ハ螺桿ヲ挟ミ次ニ螺機ヲ右ニ廻シテ堅ク之ヲ緊メタル後柄ヲ廻シテ牝螺或ハ螺桿ヲ螺著ケ又ハ離脱ス

第五章 砥類

一 荒砥

第五十八

刃具ノ刃ノ闕ケタルトキ或ハ新ニ刃ヲ附クル場合等刃ヲ多ク研卸スニ用ウ
使用上ノ注意 此ノ砥ニテハ刃ノ裏面ヲ研カサルモノトス

二 青砥

第五十九 荒砥ニテ研キタルモノ或ハ刃ノ鈍リタルモノヲ研クニ用ウ
 使用上ノ注意 刃尖ノ稍裏面ニ反ル迄研クヘシ此ノ砥ニテモ刃ノ裏面ヲ研カサルモノトス

三 合砥

第六十 刃具ヲ研キ上クルニ用ウ

四 鋼砥

第六十一 刃具ヲ裏押ウラオシ(刃尖ノ闕損或ハ磨滅シタルトキ其ノ裏面ヲ平坦ナラシムルコトヲ謂フ)スルニ用ウ
 使用法 砥面ニ少許ノ細末金剛砂サイマツコングラウシヤヲ撒キ僅ニ水ニテ濕シ刃ノ裏

面ヲ研キテ平カナラシムルモノトス

幅廣キ鉋ヲ裏押スルニハ豫メ裏面ヲ下ニシ硬キ木材上ニ置キ刃尖ヲ僅ニ材面ヨリ外シテ鋼ノ鍛著部ノ稍後方ヲ鐵錐ニテ輕ク打チ一様ニ金肉カネヲ裏面ニ打出スヲ可トス而シテ此ノ際刃尖ヲ損セサル様注意スヘシ

第六章 検査

第六十二 工具ノ検査ニ方リテハ概ネ次ノ各號ニ注意ス

- 一 遊標尺ハ上下兩嘴ヲ密著セシメタルトキ間隙ヲ生セサル

- 一 ヤ、其ノ尖端ハ磨滅シアラサルヤ、遊標ノ零位ハ桿ノ零位ト正シク一致スルヤ、駐螺及發條ハ共ニ其ノ機能完全ナルヤ
- 二 曲尺ノ分畫ハ磨滅シアラサルヤ、其ノ長、短兩邊ハ互ニ直交シアルヤ
- 三 卷尺ノ尺布ハ磨損シアラサルヤ
- 四 兩脚規ハ脚ノ尖端磨滅若ハ屈曲シアラサルヤ、樞鉸ノ緊一定適度ナルヤ
- 五 鋸類ノ身ハ真直ナルヤ、齒振正シキヤ、目立適當ナルヤ
- 六 鉋ハ刃ノ表、裏面ノ研方適當ナルヤ、臺ハ正シキ形ヲ保チアルヤ

- 七 一般ニ刃具ノ刃部ハ磨滅若ハ闕損シアラサルヤ
- 八 木工臺ノ作業面ニ凹凸ナキヤ
- 九 柄類ハ正シク且確實ニ裝著セラレアルヤ
- 十 砥面ハ平坦ナルヤ、砥ト臺トハ確實ニ接著シアルヤ

十 意面へ平掛マハテ、孤イ臺イハ筋貫ニ對着マハテ
 火 耐震ヘ五マシ且耐震ニ對着マシマテ、
 八 木工臺、非業面ニ四角マシマテ、
 小 二類ニ匠具、匠師ハ組立書ハ圖用マシマセマシマテ、

第二篇 材 料

第一章 木 材

一 檜

第六十三 白檜シロガシ、赤檜等アカガシアリ質密ニシテ堅ク且強シ然レト
 モ反張モツリ、乾裂ヒワレヲ生シ易ク又動モスレハ蟲害ヲ受クルコトアリ
 轆桿エンカン、轆木エンボク、輻フク、遊動棍イワドウコン、繫馬抗ケイバコウ、洗桿センカン、船、鉋臺、槌類其ノ
 他器具ノ柄等ニ用ウ

二 櫟

第六十四 櫟ニ次キテ強ク反張、乾裂ヲ生シ難ク殊ニ濕氣

木 材

ノ害ヲ受クルコト少シ
鞆、象限儀匣、眼鏡匣、輜重車ノ床板、輜重駄鞍ノ板木、木口盤等ニ用ウ

三 鹽地

第六十五 樺ニ類スルモ其ノ質稍粗ニシテ木目概ネ真直ニ通り折レ難ク能ク濕氣ニ耐ユ然レトモ軟質ノ部分ヲ含ムモノ多シ

架橋器材其ノ他梯子、電柱等ニ用ウ

四 檜

第六十六 質密ニシテ樹脂氣ヲ含ミ木目概ネ真直ニ通り

反張、乾裂ヲ生スルコト少キモ陽疾アルモノ多シ
前車ノ中箱、器具箱、携行鞆、携行職工具箱、鋸柄、錐柄等ニ用ウ

五 杉

第六十七 質粗ニシテ軟ラカク木目概ネ真直ニ通り其ノ赤身ハ濕氣ニ對シ能ク久キニ耐ユ
屯營用職工具箱、彈藥箱、架橋器材ノ板、踏板等ニ用キ其ノ細キ丸太材ハ鈎篙等ニ用ウ

六 樅

第六十八 質粗ニシテ軟ラカク反張、乾裂ヲ生シ易シ而

シテ節、入皮及陽疾アルモノ多シ、
彈藥箱、火工具箱等ニ用ウ

七 松

第六十九 黒松、赤松等アリ質稍粗ニシテ多量ノ樹脂氣ヲ
含ミ地中若ハ水中ニテハ能ク久キニ耐ユ而シテ脂壺ヲ含ムモノ
多シ

八 櫻

第七十 質密ニシテ能ク乾キタルモノハ容易ニ歪ヲ生セサ
ルカ故ニ精密ナルモノヲ造ルニ適ス

水準器、射撃板等ニ用ウ

九 山毛櫸

第七十一 質密ニシテ韌性ニ富ミ材面ニ無數ノ小ナ
ル斑點アリ一見シテ他ノ木材ト區別スルコトヲ得而シテ濕氣ノ
害ヲ受クルコト比較的多シ

十 朴

第七十二 質密ニシテ能ク乾キタルモノハ反張、乾裂ヲ生
スルコト少シ又裁臺ニ用ウルトキハ刃具ノ刃尖材中ニ切込ムコ
ト少ク且刃ヲ損セサル特性アリ

填藥盤、截革盤、螺範匣等ニ用ウ

十一 白楊

第七十三 質軟ラカク擊突ヲ受クルモ其ノ部ニ凹ヲ生スルノミニシテ割レ難シ

彈藥箱、火藥箱等ニ用ウ

十二 胡桃

第七十四 抗力大ナルニ比シ其ノ重量輕ク能ク乾キタルモノハ反張、乾裂ヲ生スルコト少ク永ク用ウルトキハ光澤ヲ發ス

銃床、銃劍ノ柄木等ニ用ウ

十三 棕

第七十五 質密ニシテ堅ク割レ難シ

軍刀ノ柄材、木口盤、調線桿ノ柄、土搔柄等ニ用ウ

十四 木材ノ鑑別

第七十六 木材ハ製作品ノ種類ニ依リ採用ノ程度ニ差異アルモ一般ニ品質良好ナルモノハ材面ニ疾患、反張、乾裂及傷痕ナク各部等質ニシテ木目眞直ニ通ルモノトス

第七十七 木材ノ疾患トハ概ネ左ノ如キモノヲ謂フ

一 入皮 木材内ニ皮ノ入込ミタルモノニシテ其ノ部ハ離レ

易シ

- 二 瘤ヲ 一部ノ木目渦狀ワツガタヲ成シ無數ノ小孔ヲ有スルモノニシテ力甚弱シ
- 三 陽疾 木目粗ク且樹脂氣ヲ含ムコト多ク色濃クシテ割レ或ハ捻ネジレ易シ
- 四 脂壺ヤニツボ 木材内ニ樹脂ヲ蓄タマヘタル孔ナリ
- 五 節 枝ノ痕アトニシテ生節イキブシ、死節シニブシアリ生節ハ其中心ヨリ割レ易ク死節ハ木質ト離レテ孔トナリ易シ
- 六 蟲蝕ムシクヒ 蟲害ニ依リ木質ニ生シタル孔ナリ
- 七 目切メギレ 木目ノ端木材ノ側面ニ出ツルモノニシテ之ヲ柄類ニ使用スルトキハ折レ易シ

- 八 繩目ナハメ 木目ノ形繩ヲ解キタルカ如キモノニシテ其ノ甚シキモノニ在リテハ材面ニ木口ヲ現ハスヲ以テ割レ或ハ折レ易シ
- 九 乾朽ムレ 風通惡ク乾燥十分ナラサルトキ生スルモノニシテ其ノ色褪アセ質脆シ

第二章 糊類

一 膠ニカハ

第七十八 粘氣強ク木材ヲ接合スニ適ス褐色透明ニシテ臭氣ナキモノヲ良トス

膠ヲ溶カスニハ膠鍋ヲ用ウ其ノ配合ノ割合ハ水一合ニ對シ膠約
ネ二百二十瓦トス

二 蕨糊ワラビコ

第七十九 澁ト混シ各種駄鞍ノ居木キギニ荒目麻布ヲ貼附ク
ルニ用ウ

調製法 先ツ蕨粉ヲ銅鍋ニ入レ逐次少量ノ水ヲ加ヘテ能ク溶カ
シ(蕨粉百瓦ニ付キ水四合五勺ノ割合)攪拌カキマハシツツ煮テ糊ト爲
シ稍冷エタル後澁(三百瓦)ヲ加ヘ十分練合スモノトス

第二章 塗抹材料

一 上塗塗料ウハスリトリヤウ

第八十 各色ノ固練カタネリ「ペンキ」ヲ「ドライヤー」ト練合セ
之ニ煮亞麻仁油ニマ、「ゴールドサイス」、「コーバルワニス」等ヲ
加ヘテ製シタルモノニシテ數種アルモ最多ク用キラルルモノヲ
茶褐色塗料トス

二 下塗塗料シタスリトリヤウ

第八十一 鐵部ニ上塗塗料ヲ施スニ先チ防錆サビドメトシテ用
ウ

調製法 先ツ少量ノ生キ(煮)亞麻仁油ニテ光明丹ヲ餅狀ニ搗混フキマ
セ次ニ「ドライヤー」及生キ(煮)亞麻仁油ヲ少量ツツ加ヘテ練

リ更ニ生(煮)亞麻仁油ヲ加ヘ要スレハ「ペンキ」濾器若ハ白木綿ニテ濾スモノトス
配合ノ割合概ネ左ノ如シ

光 明 丹 八百二十瓦

生(煮)亞麻仁油 百二十瓦

「ドライヤー」 六十瓦

三 漆

第八十二 通常灰白色ヲ呈シ乾燥スルトキハ黒褐色ニ變ス日光及普通ノ熱ニテハ乾燥スルコト遲シト雖濕氣ヲ含メル暖キ空氣或ハ高キ熱ニ遇フトキハ乾燥シ易シ生正味漆、瀨縮漆及

蠟色漆等アリ

線出線懸千段卷等ニ塗り又隱顯燈外部ニ燒漆ヲ爲スニ用ウ
注意 漆ハ皮膚ヲ侵シ易キヲ以テ其ノ取扱ニ注意スヘシ

四 假漆

イ 酒精製假漆 (「ベルニー」)

第八十三 「セルラツク」ヲ酒精ニ溶カシタルモノニシテ

主トシテ木部等ニ塗ルニ用ウ

調製法 酒精ト「セルラツク」トヲ混シ時時攪拌シテ溶カシ約
ネ八時間(日光ニ曝ストキハ尙速ナリ)ヲ經タル後濾スモノト
ス

配合ノ割合概ネ左ノ如シ

「セルラツク」

百

酒 精

二合五勺

油製假漆

第八十四

「コーバル」ノ如キ樹脂類ヲ通常煮亞麻仁油ニ

溶カシ若干ノ顔料ヲ加ヘ色ヲ著ケタルモノニシテ鐵具類ニ塗ル

ニ用ウ

ハ「テレピン」油製假漆

第八十五

「土瀝青」^{アスファルト}、「セルラツク」、「コールタール」及「テ

レピン」油ヲ混シタルモノニシテ露天ニ置ク兵器ノ金屬部ニ塗

ルニ用ウ

第四章 脂油其ノ他

第八十六

脂油ニハ引火シ易キモノ多ク又之ヲ含メル布

片、雜巾等ヲ堆積シ置クトキハ發火シ易キモノアルヲ以テ其ノ

取扱ニハ特ニ注意スヘシ

一 格納用礦油

第八十七

概ネ綠色ヲ帶ヒタル褐色ノ半固體ニシテ永ク

防錆ノ效アリ故ニ久ク格納スル鐵具ニ用ウ而シテ之ヲ用ウルニ

ハ通常湯煎鍋ニテ溶カスモノトス

脂油其ノ他

二 「ワセリン」

第八十八 白色ノ軟ラカキ半固體ナルモ熱ニ遇ヘハ融ケ易シ故ニ主トシテ常用若ハ一時格納スル鐵具ノ防錆又ハ齒輪、螺絲部等ノ防擦ニ用キ其ノ他發黴豫防ノ爲革具用複合脂ニ混入ス

三 「パラフィン」

第八十九 白色ノ固體ニシテ寒氣ニ遇ヘハ脆クナリ易シ故ニ多クハ「ワセリン」ト混シテ防錆、防擦ニ用キ又ハ「パラフィン」紙トシテ鐵具ヲ包ミ或ハ不溶解石鹼等ト混シテ防水劑ヲ製スルニ用ウ

四 常用礦油

第九十 淡黄色又ハ淡赤褐色ノ液體ナリ主トシテ常用鐵具ノ防錆、防擦ニ用キ又ハ牛脂ト混シテ防擦脂ヲ製ス

五 鯨油

第九十一 結氣アル無色又ハ淡黄色ノ液體ナリ主トシテ牛脂ト混シテ革具用複合脂ヲ製ス

鯨油ノ臭味惡キモノ或ハ色相濃キモノハ不良トス又冬季ハ濁リ易キヲ以テ先ツ之ヲ温メ其ノ澄メルヲ認メタル後用ウヘシ

六 牛脂

第九十二 白色又ハ淡黄色ノ固體ニシテ味ナク殆ト臭ナ

シ鯨油ト混シテ革具用複合脂、常用礦油ト混シテ防擦脂、白色「ペンキ」等ト混シテ防錆脂ヲ製ス

注意 牛脂ノ表面黄色ヲ呈シタルモノハ其ノ部分ヲ除キテ用ウヘシ又腐リ易キヲ以テ容器ハ之ヲ密閉スヘシ

七 「テレピン」油

第九十二 無色又ハ淡黄色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ揮發シ易シ主トシテ塗料ヲ製シ或ハ之ヲ剝カスニ用キ又ハ「ナフタリン」ヲ溶カスニ用ウ
石油又ハ揮發油ノ臭ヲ含ムモノハ不良トス

八 石油

第九十四 無色又ハ淡紫色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ甚シキ油垢、錆又ハ火藥ノ燼渣ヲ洗フニ用ウ

注意 石油ハ金物ヲ侵スモノナルヲ以テ使用後ハ十分之ヲ拭取ルヘシ

九 揮發油

第九十五 無色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ揮發シ易シ電話機ノ如キ精密機械ノ手入ヲ爲シ或ハ油垢、錆若ハ火藥ノ燼渣ヲ洗ヒ又ハ「ナフタリン」ヲ溶カスニ用ウ

揮發油ハ之ヲ掌ニ滴ストキハ全部揮發シ去リテ石油又ハ其ノ他ノ惡臭ヲ止メサルモノヲ良トス

注意

- 一 揮發油ヲ用キテ金物ヲ手入シタル後ハ十分之ヲ拭取ルヘシ否サレハ金物ヲ侵スコトアリ
- 二 揮發油ハ最引火シ易キヲ以テ特ニ火氣ヲ遠サクルコトニ注意スヘシ

十 生(養)亞麻仁油

第九十六 生亞麻仁油ハ褐色ヲ帶ヒタル黄色ノ液體ニシテ乾キ易ク空氣ニ曝ストキハ漸次濃クナリ粘氣ヲ帶ヒ遂ニハ膜ヲ生ス

養亞麻仁油ハ生亞麻仁油ヲ熱シ之ニ乾燥劑ヲ加ヘタルモノニシ

テ生亞麻仁油ニ比シ其ノ色濃ク通常赤褐色ヲ呈シ粘氣大ニシテ一層乾キ易シ

防濕或ハ防錆用トシテ麻布、銃床、鋼索類ニ塗り又ハ各種塗料ヲ製スルニ用ウ

十一 「クレオソート」油

第九十七 綠色ヲ帶ヒタル褐色ノ液體ニシテ特異ノ臭アリ木材ニ浸込ミ易ク又塗料ヲ溶解シ金屬ヲ侵ス性アリ主トシテ塗料ヲ施ササル木材及竹製品ノ防蝕及防蟲ニ用ウ

十二 「ナフタリン」

第九十八 粉末ノモノト固形ノモノトアリ白色ニシテ光

澤ヲ有シ特異ノ強キ臭アリ主トシテ毛製品、鞍褥及極褥等ノ防
蟲ノ爲其ノ儘又ハ揮發油、「テレピン」油ニ溶カシテ用ウ

十三 炭酸曹達タンサンソウダ (洗濯曹達センタクソウダ)

第九十九 透明ナル固體ニシテ水ニ溶ケ易シ主トシテ垢
及油ノ附キタル麻製品等ヲ洗フニ用ウ

注意 炭酸曹達ニテ洗ヒタルモノハ更ニ水ニテ十分洗フヘシ

十四 苛性曹達カセイソウダ

第百 白色ノ脆キ固體ニシテ水ニ溶ケ易シ主トシテ「ペン
キ」塗料ヲ剝カスニ用ウ

注意 苛性曹達ハ物ヲ侵スコト特ニ強キヲ以テ使用後ハ水ニ

テ十分洗フヲ要ス又使用者ハ成ルヘク直接ニ手ヲ觸レサル如ク
スヘシ

第三篇 作業

第一章 基本作業

一通則

第百一 本章ハ各種ノ作業法ヲ部分的ニ説明セルモノニシテ第一篇工具ノ使用法ト相俟チテ其ノ要領ヲ會得^{エトク}セシメ以テ修理作業ノ基礎ヲ成スヘキモノトス

第百二 基本作業ノ要領ヲ會得セスシテ修理作業ヲ行フトキハ良好ナル結果ヲ得ルコト能ハス故ニ本作業ハ綿密ニ意ヲ用キ厳正ニ實施スルヲ要ス

二 木材ノ挽切法 ヒキキリカタ

第二百二

左ノ要領ニ依リ材面ニ墨線ヲ打チ此ノ線ニ準ヒ所要ノ鋸ニテ挽切ルモノトス

- 一 薄キ板ニ在リテハ單ニ其ノ表面ニ所要ノ墨線ヲ打ツヘシ
- 二 厚キ板（通常一寸以上）若ハ角材ニ在リテハ材ノ表面ニ所要ノ墨線ヲ打チ之ヲ木工臺ノ上ニ置キ曲尺ノ一邊ヲ臺ノ表面、他邊ヲ材ノ木口若ハ側面ニ沿ヘ表面ノ墨線ヲ兩木口若ハ兩側面ニ寫シ之ヲ裏面ニテ結ヒ附クヘシ但シ正シク鉋削セラレタル木材ヲ中心線ニ直角ニ挽切ル場合ニハ曲尺ヲ其ノ面ニ沿ヘ順次ニ墨線ヲ打ツヘシ

三 丸棒ニ在リテハ先ツ木工臺ノ止木トメギニ接シテ丸棒ノ半徑ヨリ稍厚キ板ヲ置キ之ニ丸棒ヲ横ニ托シ次ニ臺側ニ鉛筆若ハ墨指ヲ接シ其ノ端ヲ丸棒ニ附ケ之ヨリ離スコトナク丸棒ヲ廻シテ線ヲ畫クモノトス但シ兩端ノ半徑異ル丸棒ニ在リテハ細キ方ニ適當ノ枕木ヲ置クヘシ

三 木材ノ鉋削法 ケツリカタ（第二十圖）

第二百四

板ヲ鉋削スルニハ通常左ノ方法ニ依ル

- 一 板ノ裏面ヲ削リテ其ノ捻ネヂレ及凹凸ヲ略修正シタル後表面ヲ平ニ削リ次ニ所要ノ厚サニ野引ヲ定メ表面ヲ定規トシ兩側面及木口ニ線ヲ畫キ此ノ線ニ準ヒテ裏面ヲ正シク削ルヘシ

二 表面上ノ一側縁ニ沿フテ墨線ヲ打チ之ニ準ヒ表面ト直角ニ其ノ側面ヲ削リ次ニ此ノ側面ヲ基準トシ所要ノ幅ヲ定メテ墨線ヲ打チ之ニ準ヒ要スレハ鋸ニテ挽切リタル後他ノ側面ヲ削ルヘシ

三 一方ノ木口ニ沿ヒ曲尺ニテ側面ト直角ニ墨線ヲ打チ之ニ準ヒ要スレハ鋸ニテ挽切リタル後正シク削リ次ニ長サヲ定メテ他ノ木口ヲ削ルモノトス
木口ヲ削ル際ニハ縁ノ闕クルヲ防ク爲豫メ稜角ヲ削取り木工臺ニ壓著ケテ削ルヲ可トス

第百五 小ナル方柱ヲ鉋削スルニハ通常左ノ方法ニ依ル

- 一 第一面ヲ平ニ削リタル後隣ノ第二面ヲ之ト正シク直角ニ削ルヘシ
- 二 罫引ヲ幅及厚サニ應スル寸度ニ定メ第一及第二面ヲ基準トシテ線ヲ畫キ之ニ準ヒ第三、第四面ヲ削ルヘシ
- 三 曲尺ヲ以テ第一面ヲ定規トシ一方ノ木口ニ沿ヒ四面ノ周圍ニ直角ニ線ヲ畫キ要スレハ鋸ニテ挽切リタル後正シク削リ次ニ長サヲ定メテ同様ニ他ノ木口ヲ削ルモノトス

第百六 稍大ナル方柱ヲ鉋削スルニハ先ツ木材ヲ圖ノ如ク

臺上ニ置キ(イ)(ロ)ノ上面ヲ平ニシ其ノ上ニ曲尺ヲ置キ之ヲ覘ヒテ捻ヲ正シ曲尺ニ沿ヒテ線ヲ畫キ次ニ此ノ線ノ兩端ヲ結ヒ附

クル如ク木材ノ兩側面上ニ墨線ヲ打チ此ノ四線ニ準ヒ表面ヲ正シク鉋削シ更ニ之ヨリ所要ノ厚サヲ定メテ墨線ヲ打チ其ノ裏面ヲ削リ以上ノ兩面ヲ基準トシテ木口ノ中央ニ線ヲ畫キ之ヨリ兩側ニ所要ノ幅ヲ定メテ墨線ヲ打チ之ニ準ヒテ側面ヲ削リ最後ニ木口ヲ削ルモノトス

第一百七 丸棒ヲ鉋削スルニハ豫メ木材ヲ方柱ト爲シ兩木口ニ所要ノ圓ヲ畫キ之ニ準ヒテ先ツ各稜ヲ等シク削リテ八角形ト爲シ逐次此ノ如クシテ圓形ニ仕上クルモノトス

四 穿孔法アチアチカキ(第二十一圖)

第一百八 貫通セサル方孔カッアチヲ穿ツニハ豫メ材ノ表面ニ所要ノ

墨線ヲ打チ先ツ平鑿ニテ孔ノ兩側ヲ真直ニ切下ケタル後厚鑿ノ刃裏ヲ後方ニシ後縁ニ沿ヒ真直ニ打込ミ次ニ其ノ前方適宜ノ所ニ鑿ヲ稍前ニ傾ケテ打込ミ其ノ柄ヲ壓下ケテ木屑ヲ除キ逐次之ヲ繰返シテ所望ノ深サニ達セシム此ノ際要スレハ孔ノ側面ヲモ切下クヘシ次ニ厚鑿ノ刃裏ヲ前ニシ前ト同要領ニ依リ孔ノ前縁ニ沿ヒテ打込ミ殘ノ部分ヲ刻取リタル後底ヲ浚サラヘテ略平坦ナラシメ最後ニ平鑿若ハ押鑿ニテ四面ヲ削リ仕上ヲ爲スモノトス

第一百九 貫通スル方孔ヲ穿ツニハ先ツ表面ニ所要ノ墨線ヲ打チ次ニ其ノ前、後兩縁ノ墨線ヲ裏面ニ引廻シ此ノ二線間ニ表面ト對向スル位置ヲ測リ兩側ノ墨線ヲ打チ前條ト同要領ニ依リ

表、裏両面ヨリ穿ツモノトス

第百十 圓孔ヲ穿ツニハ孔ノ大サニ應シ轉柄匙錐、轉柄三齒錐若ハ螺錐ヲ用キ要スレハ圓鑿ニテ仕上クルモノトス

五 接合法（第二十二圖）

第百十一 板ヲ接合スニハ通常甲圖ノ如ク接合面ニ凹凸ヲ附シ之ニ膠ヲ塗リテ摺合セ密著セシメタル後堅ク締著ケテ乾カスモノトス之ヲ核接サネハギト謂フ又乙圖ノ如ク接合面ニ核ヲ挿込ミテ接合スコトアリ之ヲ雇核接ヤトヒサネハギト謂フ

板ノ側面ヲ丙圖（イ）ノ如ク削リ膠ヲ塗リテ接合スコトアリ之ヲ燕口接フバクロハギト謂フ

膠著ヲ爲スニハ先ツ接合面ヲ火上ニテ温メタル後膠ヲ塗リ再ヒ之ヲ温メ其ノ泡立ツヲ待チテ能ク摺合セ密著セシムヘシ而シテ膠ハ多量ナレハ乾キ難キノミナラス其ノ效少キモノトス

六 切組法（第二十三圖乃至第二十五圖）

第百十二 板ヲ切組ムニハ通常相缺アヒカギ、三板納サンマイホツ、蟻差アリヤシニ依リ其ノ他ノ木材ヲ組合スニハ柄差ニ依ル

第百十三 相缺及三板納ハ一般ニ用ウル方法ニシテ第二十三圖ニ示セル如ク相缺ニ在リテハ用材ノ幅ヲ二等分シ互ニ其ノ一部ヲ切去リ三枚納ニ在リテハ之ヲ三等分シ一枚ハ其ノ中央部、他板ハ其ノ兩端ヲ切去リ隙間スキマナク密著セシメタル後釘ヲ打

ツモノトス

第百十四 蟻差ハ稀ニ用ウル方法ニシテ第二十三圖ノ如ク兩板ニ互ニ相合スル柄及柄孔ヲ造リ之ヲ組合スモノトス但シ柄孔ノ深サハ相對スル板ノ厚サニ等シク又柄ヲ經始スルニハ第二十四圖(イ)ノ如キ特別ノ定規ヲ用キ一板ハ他板ノ柄ヲ造リタル後之ニ準ヒテ經始スルモノトス

第百十五 柄差ハ第二十五圖ノ如ク一材ニハ柄、他材ニハ柄孔ヲ造リ之ヲ組合スモノトス

貫通スル柄ニ在リテハ之ヲ稍長クシ且柄ノ中央若ハ兩端ニ鋸目ヲ入レ置キ挿込ミタル後楔ヲ打込ミテ之ヲ固定シ餘端ヲ挽切ル

カ或ハ單ニ柄ヲ稍長クシ挿込ミタル後柄ト直角ニ孔ヲ穿チ込栓ヲ打込ミテ之ヲ固定スルモノトス

貫通セサル柄(包込柄)ニ在リテハ柄孔ノ深サヲ材ノ厚サノ約ネ三分ノ二トシ柄ノ長サハ柄孔ノ深サヨリ稍短クシ組合セタルトキ兩材間ニ間隙ナキ如クスルヲ要ス又此柄ハ固定ノ爲楔等ヲ用キサルヲ以テ柄及柄孔ハ互ニ密接スル如ク造ルコトニ注意スヘシ

七 打釘法 クギウチカタ

第百十六 洋釘ヲ打ツニハ先ツ錐ノ尖端僅ニ下方板ニ侵入スル迄孔ヲ穿チ次ニ其ノ孔ニ釘ヲ挿込ミ鐵鎚ニテ強ク打込ム

へシ而シテ木口ニ近ク釘ヲ打ツ場合ニハ下方板ノ厚サ約ネ三分ノ二内方ヨリ斜ニ外方ニ向ケテ打込ムへシ之レ木材端末ノ闕損、割裂等ヲ防キ且堅固ニ釘著スルノ利アレハナリ又釘ノ長サハ板ノ厚サノ約ネ二倍半ヲ適當トス

軟ラカキ木ニ在リテハ豫メ錐ニテ孔ヲ穿タサルコトアリ

第百十七 木釘ヲ打ツニハ先ツ釘ノ長サニ等シキ孔ヲ穿

チ次ニ錐ノ形ニ準ヒテ削リタル釘ノ尖端ニ糊ヲ附ケ之ヲ挿込ミ鐵錐ニテ輕ク打込ムへシ而シテ釘ノ尖端孔底ニ達スルニ至レハ錐打ヲ止ムへシ否サレハ錐打ノ反撞ニテ兩材間ニ間隙ヲ生スルコトアリ

八 墨掛木取法

第百十八 木取ヲ爲スニハ木材ノ不良ナル部分ヲ避ケ且成ルヘク屑ヲ出ササル如ク所望ノ寸度ニ墨線ヲ打チタル後挽切ルモノトス而シテ木材ハ常ニ品質完全ナルモノヲ得難キヲ以テ兵器ノ種類ニ依リ多少不良ナル部分ヲ含ムモノト雖之ヲ採用スルコトアリ

イ 柄類

第百十九 柄類ハ木目眞直ニ通ルヲ要スルモ輕キ目切ハ妨ケナシ然ルトキハ目切ノ方ヲ握柄部ニ用ウヘシ
生節ノ小ニシテ兩面ニ通ラサルモノハ妨ケナシト雖死節アルモ

ノハ用ウヘカラス又乾裂ノ小ニシテ淺ク且目切ナキ部分ニ在ル
モノハ妨ケナシ

ロ 箱類(第二十六圖)

第二百二十 一般ニ榫目ヲ可トスルモ箱ノ種類ニ依リ板目
ヲ用ウルモ妨ケナシ又生節ノ一面ニ止マルモノ若ハ兩面ニ通ル
モ一方ノ小ナルモノニシテ釘ヲ打ツ部分竝周縁ニ在ラサルモノ
ハ妨ケナシ而シテ先ツ板ノ良部分ヲ長キ側板若ハ蓋板ニ引充テ
然ル後底板及短キ側板ヲ木取ルヘシ

注意 榫目ノ板ハ第二十六圖(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ヘ)ノ如ク又四方
榫ノ角材ハ(ホ)ノ如ク木取ル

九 塗抹法、剝脱法

イ 上塗塗料及下塗塗料ノ塗抹法

第二百二十一 上塗塗料ハ通常少クモ二回塗重ヌルモノト
ス又鐵部ニ上塗塗料ヲ塗ルニハ先ツ下塗塗料ヲ施シ其ノ乾クヲ
待チテ之ヲ行フモノトス

注意

- 一 塗抹ニ先チ塵埃、泥土等ヲ拭ヒ又油垢ハ「テレピン」油若
ハ揮發油ニテ拭去ルヘシ
- 二 鐵部ニ錆ヲ生シタルモノハ能ク磨キテ之ヲ除クヘシ否サレ
ハ塗料剝ケ易ク且防錆ノ用ヲ爲ササルモノトス

- 三 木部ハ十分乾キタル後塗ルヘシ若木部ニ油氣ヲ帶ヒ十分乾カサルトキハ先ツ薄ク「ベルニー」又ハ「コーバルワニス」ヲ塗ルヲ可トス
- 四 塗抹ノ順序ハ一般ニ内方、下方等作業困難ナル箇所ヨリ始ムルヲ可トス
- 五 塗料ハ素地^{キチ}ヲ被ヒ得ルヲ度トシ一樣ニ成ルヘク薄ク塗ルヲ可トス
- 六 刷毛ニ附クル塗料ハ多キニ過キサリヲ可トス
- 七 刷毛ハ成ルヘク傾クルコトナク同シ速サニテ輕ク用キ最後ニハ同シ方向ニノミ用ウヘシ

- 八 塗料ノ乾カサル前ニ他物ヲ觸レシムヘカラス
- 九 下塗ノ十分乾カサルモノニ上塗ヲ爲スヘカラス又塗落シナキ様注意スヘシ
- 下塗乾キタルトキハ布鑑ニテ擦リタル後上塗ヲ爲スヲ可トス
- 十 刷毛ハ使用後直ニ「テレピン」油等ニテ洗ヒ置クヘシ若數日間連續用ウル場合ニハ水中ニ浸シ置クモ可ナリ
- ロ 上塗塗料及下塗塗料ノ剝脫法
- 第二百二十一 塗料ノ塗換ハ通常全部ニ對シテ行フモノナルモ時トシテ補修塗ニ止ムルコトアリ

鐵部ノ塗料ヲ塗換フルニハ通常舊塗料ヲ剝カシタル後新ニ塗料ヲ塗ルモノトス

木部ノ塗料ヲ塗換フルニハ通常舊塗料ヲ剝カスコトナク表面ヲ布鏝等ニテ磨キ其ノ上ニ塗重ヌルモノトス

第二百二十二 鐵部ノ塗料ヲ剝カスニハ通常左ノ方法ニ依ル

一 鐵^{カネベラ}篋ヲ用ウル場合 兵器ヲ傷ツケサル如ク鐵篋ニテ塗料ヲ搔落シタル後布鏝ニテ磨キ雜巾ノ類ニテ拭フモノトス但シ補修塗等ノ爲一部ヲ剝カストキハ舊塗料ノ端ヲ斜ニ擦落スヘシ

二 藥液ヲ用ウル場合 藥液(揮發油、「テレピン」油等)ヲ雜巾ニ浸シテ之ヲ塗り塗料ノ軟ラカクナルヲ待チ束藁又ハ鐵篋等ニテ剝カシタル後能ク拭フモノトス又苛性曹達(苛性曹達液ニ常用礦油及鋸屑ヲ加フ)ヲ用ウルコトアリ然ルトキハ剝カシタル後水ニテ十分洗ヒ要スレハ更ニ揮發油ヲ以テ拭フヘシ

ハ 假漆ノ塗抹及剝脫法

第二百二十四 假漆ノ塗抹法ハ晴レタル日ヲ選ヒ上塗塗料ノ塗抹法ニ準ヒ通常二、三回塗重ヌルモノトス

第二百二十五 假漆ヲ剝カスニハ通常「テレピン」油(「ベ

ルニ一ニ對シテハ酒精ヲ雜巾ニ浸シテ之ヲ塗り塗料ノ軟ラカクナルヲ待チ雜巾又ハ束藁等ニテ剝カシタル後能ク拭フモノトス

第二章 修理作業

一 通 則

第二百二十六 軍隊ニ於テ行フ修理ハ兵器取扱規則ニ依リ其ノ制限ヲ受クルモノトス

第二百二十七 一般ニ修理ハ制式寸度ニ合スルヲ勉メ妄ニ之ヲ變更スルヲ許サス又材料ハ成ルヘク修理品ト同質ノモノヲ

用ウヘシ

第二百二十八

工卒ハ工長ノ指示ニ從ヒ修理ニ任スヘキモノニシテ所要ノ工具、材料ヲ準備シタル後作業ニ從事ス而シテ

一般ニ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 釘ヲ打ツニハ成ルヘク舊孔ヲ避クヘシ

二 木螺子孔ハ螺軸ヨリモ稍小ニシテ其ノ深サハ螺子ノ長サ

ト略等シカラシムヘシ

三 目違部ノチガヒ(板ノ接合或ハ切組部)ヲ削ルニハ凹凸ナキ様ニ

スヘシ

四 金具ヲ脱スニハ木部ヲ損セサル如クスヘシ又樞鉸等ノ金

具ハ成ルヘク變形セシメサルヲ要ス

五 修理ヲ行ヒタルトキハ其ノ検査ヲ爲スヘシ

六 塗抹部ヲ修理シタルトキハ規定ノ塗料ヲ塗ルヘシ

七 修理ヲ終リタルトキハ速ニ所要ノ手入ヲ行フヘシ

二 三十年式銃劍及三十二年式軍刀

第二百二十九

柄木ヲ取換フルニハ劍身ノ柄込^{エゴミ}ノ孔ト柄木

ノ孔ト合スル如ク柄木ノ兩端ヲ削リテ柄込ニ合セ次ニ外側(駐
筈頭ノ反對側)ノ柄木ニ駐坐、内側ノ柄木ニ駐牝螺ヲ箵メ柄木駐
螺ヲ螺著ケタル後柄木ノ周圍ヲ鐵部ニ觸レサル程度ニ削リ適當
ノ形ヲ與ヘ終ラハ駐螺、駐坐及駐牝螺ヲ脱シ柄木ヲ取り其ノ表

面ヲ細目布鏡ニテ磨キ再ヒ結合ノ上養(生)亞麻仁油ヲ塗ルヘシ
駐坐及駐牝螺ノ柄木面ヨリ出ツルモノアルトキハ柄木ノ室ヲ適
宜ニ削リ其ノ面ヲ平カナラシムルモノトス

第二百二十

柄材ヲ取換フルニハ先ツ適度ニ柄材ヲ削リテ

駐螺孔ヲ一致セシメ且體ノ内面ニ密著スル如クシ次ニ駐爪發條
ノ室ヲ穿ツヘシ而シテ發條ノ外縁モ亦柄材ト密著セシムルモノ
トス

三 鞍骨類(第二十七圖)

第二百二十一

三十年式乘馬具乘鞍ノ居木後端闕損シタル

モノハ端末綴釘孔ノ内方ニ於テ闕損部ヲ斜ニ切取リ膠ニテ新材

ヲ繼合セ舊形ニ準ヒテ仕上ヲ爲スモノトス驂馬鞍、馱鞍等ノ木
部端末ノ小闕損ハ適度ニ圓ク削リ其ノ大ナル闕損若ハ力木ノ闕
損シタルモノハ之ヲ取換フヘシ

四 箱 類

第二百二十一 二面ヨリ釘著セル側板ノ破損セルモノヲ取
換フルニハ要スレハ豫メ蓋板及底板ヲ離脱シ先ツ取換フヘキ板
ヲ切組部ニ近ク挽切り其ノ殘部ヲ鑿ニテ數片ニ割取リ次ニ釘
ヲ拔去リタル後切組部ニ準ヒテ新材ニ柄ヲ造リ組合スモノト
ス

第二百二十三 底板ヲ取換フルニハ豫メ舊板ヲ取去リ先ツ

新材ノ長サ及幅ヲ稍大ニシ相隣レルニ邊ヲ直角ニ削リ箱體ノ長、
短兩側ヲ之ニ合シテ釘著シ次ニ他ノ兩側ノ直角ヲ檢シ底板ノ
他ノ二邊ヲ釘著シタル後箱ノ外側ニ準ヒテ此ノ二邊ヲ正シク削
ルモノトス

第二百二十四 金具ヲ取附クルニハ豫メ之ヲ檢シ捻レ等ヲ

修正スルヲ要ス而シテ木部ヲ彫リテ取附クルモノニ在リテハ先
ツ金具ヲ其ノ位置ニ置キ之ニ準^{ナラヒノセン}線ヲ畫キ金具ヲ箴メテ適否ヲ
檢シツツ彫込ムヘシ又木螺子頭ヲ容ルヘキ金具ノ孔ハ要スレハ
菊錐ニテ修正スヘシ

五 柄 類

第二百二十五 玄翁、入鏈、仕上鏈等ノ柄ヲ取換フルニハ其ノ插入部ヲ孔ノ形ニ準ヒ稍大キク削リタル後木殺キヨロシ（鏈ニテ打縮ムルコト）ヲ爲シ或ハ火ニテ乾カシ其ノ太サヲ稍縮メ後方ヨリ眞直ニ堅ク插込ミ反起マツレヲ鑢ニテ削リ修正スルモノトス

六 演習用架橋器材冠材及負桁材クワンザイフコウザイ（第二十八圖）

第二百二十六 冠材及負桁材ノ稜角部磨滅ノ度甚シキモノハ其ノ部ニ填木ウメキヲ爲シ釘著シタル後圖ノ如ク厚サ二耗ノ軟鋼飯ナシカウヘンヲ冠スルモノトス而シテ裝著後飯面ヲ材面ト同高ナラシムル爲填木ヲ釘著スル前豫メ其ノ部ヲ削取リ置クヘシ

七 輻重車

第二百二十七

輻木ノ輻接鐵エンキツテツ插入部收縮シテ動搖スルモノハ螺桿ヲ脱シ輻木ヲ拔取リ薄キ樫板ヲ添へ之ヲ插入シテ結合スヘシ此ノ際左右輻木ノ兩端ヲ同高ナラシムルコトニ注意スヘシ

第二百二十八

輻木ノ折損セルモノヲ取換フルニハ横木ヲ鋸ニテ數片ニ挽切りタル後鑿ヲ以テ床（底）板ヲ傷ツケサル如ク之ヲ割取リ次ニ長螺桿ヲ脱シテ一方ノ縦木ヲ離脱シ新調シタル横木ヲ插入シテ舊ノ如ク結合スルモノトス

圖面ノ見解
 第一節 圖面及線
 圖面ヲ以テ物體ヲ現ハスニハ通常全體圖及
 分解圖ヲ以テス但シ全體圖ニテ明瞭ナルモノハ分解圖ヲ略スル
 コトアリ
 構造ヲ明瞭ナラシムル爲全體圖若ハ分解圖ヲ更ニ前面圖(正面
 ヲリ視タルモノ)、側面圖(側面ヨリ視タルモノ)、平面圖(上
 面ヨリ視タルモノ)、斷面圖(某部ヲ切りテ現ハレタル部分ヲ示
 スモノ)等ニ分チテ現ハスコトアリ

第四篇 圖面ノ見解

第一章 圖面及線

第二百二十九 圖面ヲ以テ物體ヲ現ハスニハ通常全體圖及
 分解圖ヲ以テス但シ全體圖ニテ明瞭ナルモノハ分解圖ヲ略スル
 コトアリ

構造ヲ明瞭ナラシムル爲全體圖若ハ分解圖ヲ更ニ前面圖(正面
 ヲリ視タルモノ)、側面圖(側面ヨリ視タルモノ)、平面圖(上
 面ヨリ視タルモノ)、斷面圖(某部ヲ切りテ現ハレタル部分ヲ示
 スモノ)等ニ分チテ現ハスコトアリ

第四百四十

圖面ニ用ウル線ハ概ネ左ノ如シ

- 一 實線 ソツ 物體ノ現ハレタル部分ヲ畫クニ用ウ
- 二 點線 ヂン 物體ノ隠レタル部分ヲ示スニ用ウ
- 三 虛線 キョ 寸度、註記等ヲ記入スルニ用ウ
- 四 交點線 カウヂン 物體ノ中心線若ハ截斷部ヲ示スニ用ウ

第二章 註記

第四百四十一

圖面ニハ通常名稱、品質、寸度、重量、梯尺等必要ナル事項ヲ記シアルモノトス

梯尺トハ圖ト實物ノ大サトノ割合ヲ示スモノニシテ $(\frac{1}{1})$ 、 $(\frac{2}{1})$ 、 $(\frac{1}{2})$ 、

$(\frac{2}{3})$ 等ヲ用ウトハ圖ノ寸度實物ト同一ナルコトヲ示シ $(\frac{2}{1})$ トハ圖ノ寸度實物ノ二倍ナルコトヲ示シ $(\frac{1}{2})$ トハ圖ノ寸度實物ノ半ハナルコトヲ示ス其ノ他之ニ準フ

第四百四十二 寸度ハ耗ヲ單位トシテ記入スルヲ例トス例

「一米二七五」 (1275) 「2730.5」等ノ如シ但シ時トシテ「一米二七五」、

「二米七三〇、五」等ト記スルコトアリ

第四百四十三 重量ハ^{キログラム} 斤ヲ單位トシ記入スルヲ例トス然

レトモ少量ノ場合ニハ^{グラム} 瓦ヲ單位トス例ヘハ「五八斤」、「六斤三

四〇」、「五〇瓦」等ノ如シ

第三章 見解上ノ注意(第二十九圖)

第四百四十四 圖面ニ依リ物體ヲ造ルニハ綿密ニ研究シ細部ニ至ル迄其ノ結構ヲ會得セサルヘカラス若見解ヲ誤リ或ハ其ノ會得不十分ナルトキハ徒ニ材料ヲ費スノミナラス作業ヲ復行セサルヘカラサルニ至ルコトアリ

第四百四十五 兵器ノ構造ヲ明瞭ナラシムル爲圖面ヲ用ウ例ヘハ第二十九圖ノ如シ

第五篇 兵器保存法

第一章 手入

第四百四十六 手入ノ要旨ハ塵埃、汚垢等ヲ除キ且發錆、磨損及變質等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存ヲ確實ナラシムルニ在リ

一 金屬部

第四百四十七 鐵類ハ一般ニ發錆シ易ク又摩擦スル部分ハ自然ニ磨滅スルモノナルヲ以テ適時脂油ヲ施ササルヘカラス
第四百四十八 錆染若ハ染烘セル鐵部ニ泥土附著シタルト

キハ先ツ濕リタル布片ヲ以テ摩擦スルコトナク之ヲ拭ヒ次テ乾キタル布片ニテ輕ク拭ヒタル後含油布片ニテ薄ク塗油スヘシ
 白色ヲ呈スル鐵部ヲ強ク磨キテ殊更ニ光ヲ發セシムヘカラス又此ノ部ニハ常ニ油ヲ薄ク施スヘシ
 鍍金若ハ塗料ヲ施シタル部分ハ強ク摩擦スヘカラス又此ノ部ニハ塗油セサルモノトス
 鍍染、染烘、鍍金若ハ塗料ノ剝ケタル部分ハ白色部ニ準ヒテ塗油スヘシ
 第百四十九 銅、黃銅、青銅及礬素等ノ部分ハ布片ニテ拭フニ止メ摩擦部ノ外塗油セサルモノトス

第百五十 鐵部ノ錆ヲ除クニハ其ノ部ニ石油或ハ揮發油ヲ注キ暫時ノ後木片、木賊又ハ絨片等ヲ以テ徐カニ磨クヘシ但シ寸度ノ精密ヲ要セサルモノニ在リテハ布鏡、磨粉等ヲ用ウルコトヲ得

鐵部ニ附著セル舊油、污垢等ニシテ布片ニテ拭去リ難キモノハ刷毛又ハ布片ニ揮發油或ハ「テレピン」油ヲ含マシメテ拭フヘシ
 石油、揮發油、「テレピン」油等ヲ用キタルトキハ乾キタル布片ニテ十分此等ノ油氣ヲ拭去リタル後直ニ塗油スヘシ

第百五十一 格納品ノ鐵部（鍍金及塗料ヲ施セル部ヲ除ク）ハ一般ニ格納用礦油ヲ塗ルモノトス而シテ之ヲ塗ルニハ左

ノ要領ニ依ルヘシ

一 塗油ニハ通常刷毛又ハ毛筆ヲ用ウ但シ他ノ油ニ使用シタルモノヲ其ノ儘用ウヘカラス

二 此ノ油ハ固マリ易キヲ以テ平等ニ塗ルコトニ注意スヘシ

三 塗油ヲ爲ストキハ手套ヲ用キ手ヲ直接ニ鐵部ニ觸レシムヘカラス

二 革具

第一百五十一

革具ハ通常自然ニ硬クナリ易キヲ以テ適時脂油ヲ施ササルヘカラス

第一百五十二

革具ハ其ノ革質及用途ニ應シ塗油ノ量ヲ異

ニスルモ一般ニ左ノ要領ニ依ルヘシ

一 褐色堅牛革ヨリ成ル部分ハ塗油ノ量ヲ少クシ以テ變形ヲ防クヘシ

二 褐色多脂牛革若ハ褐色牝牛革ヨリ成ル部分ハ稍多ク油ヲ施スヘシ(給油適度ナルモノハ之ヲ指大ニ曲クルモ龜裂ヲ生セス一時變色スルモ原形ニ復スレハ革色モ亦舊ニ復スルモノトス)然レトモ多キニ過クルトキハ革質著ク柔軟トナリ爲ニ伸長或ハ變形スルヲ以テ注意セサルヘカラス

三 黄鞞革、白鞞革及「セーム」革等ヨリ成ル部分ハ塗油セサルモノトス

第一百五十四

革具ニ脂油ヲ施スニハ主トシテ表面ヨリ僅ニ油ヲ含マシメタル布片ヲ以テ平等ニ數回塗り其ノ吸收スルヲ待チ布片ニテ拭込ム^{フキコ}ヘシ但シ常用品ニシテ馬體若ハ被服ニ接スル部分ハ其ノ反對側ヨリ塗り若反對側ヨリ塗ルコト能ハサル部分ハ脂油ノ量ヲ少クスヘシ

固マリタル複合脂ハ湯煎鍋ニテ溶カシタル後用ウルモノトス

第一百五十五

革具ノ手入ニハ酸類及水ヲ用ウヘカラス但シ塵埃、泥土及汗等ニ依リ甚シク汚レタル常用品ハ軟石鹼水^{ナシセキケン}(水石鹼トモ謂フ)又ハ清水ニ浸セル刷毛若ハ布片ニテ徐カニ洗フコトヲ得

第一百五十六

雨雪天若ハ手入ノ爲多量ノ水分ヲ吸收シタル革具ハ通風良キ場所ニテ陰乾シ其ノ乾キ終ラサル前ニ稍多量ニ脂油ヲ施シ要スレハ塗油ヲ繰返スヘシ

第一百五十七

寒氣強キ季節ニ於テ革具ニ脂油ヲ施スニハ其ノ吸收ヲ容易ナラシムル爲湯煎鍋ニテ脂油ヲ適度ニ温メタル後塗ルヲ可トス又此ノ季節ニ於テハ手入後革ノ表面ニ脂油ノ浸出シテ白ク固マルコトアルモ之ヲ除クヲ要セス

第一百五十八

革具ニ黴ヲ生スルトキハ漸次革質ヲ損シ遂ニハ使用ニ堪ヘサルニ至ルモノトス而シテ濕氣多キ季節ニハ殊ニ黴ヒ易キヲ以テ之ヲ豫防スル爲屢拭淨シ且塗油ノ量及其ノ回

數ヲ減スヘシ
第一百五十九 革具ニ微ヲ認メタルトキハ直ニ之ヲ拭フヘシ而シテ此ノ際微ヲ他ニ傳播セシメサルコトニ注意シ特ニ此ノ手入ニ用キタル布片ヲ其ノ儘他ニ用ウヘカラス

第一百六十 革具ニ黒キ斑點^{ハシヤン}ヲ生シタルトキハ揮發油又ハ「テレピン」油等ヲ其ノ部ニ塗り之ヲ溶カシ布片ニテ拭去リタル後脂油ヲ施スヘシ
 金物ノ取附部ニ生シタル垢ハ布片ニテ之ヲ拭フヘシ

第一百六十一 革具ノ縫目ニハ動モスレハ餘分ノ脂油ヲ殘シ爲ニ絲質ヲ變シ綻ヒ易キヲ以テ之ヲ拭去ルコトニ注意スヘシ

縫目ニ蠟ヲ塗ルトキハ絲ノ腐朽^{フキウ}及磨損ヲ防ク效アルモノトス

三 麻製品及毛類

第一百六十二 濕氣ヲ含ミ又ハ塵埃等ヲ被リタルモノヲ其ノ儘放置スルトキハ地質ヲ害シ或ハ蟲害ヲ受クルニ至ルモノトス

第一百六十三 麻製品及毛布類ハ能ク日ニ乾シ^ホ刷毛等ニテ塵埃、汚垢ヲ除クヘシ若甚シク汚レタルトキハ清水又ハ石鹼水ニテ洗ヒ日ニ乾シタル後要スレハ之ヲ揉ミテ軟ラカクスヘシ但シ麻製品等ニ附著セル革具ハ成ルヘク濡^{ヌル}ササルコトニ注意シ且日乾前稍多量ニ脂油ヲ施スヘシ

第六百六十四

ヲ防クモノトス

毛類ニハ通常「ナフタリン」ヲ用キテ虫害

第六百六十五

行フモノトス

虫害ノ徴候ヲ認メタルトキハ特ニ殺蟲法ヲ

四 木 部

第六百六十六

裂シ時トシテ虫害ヲ受クルコトアリ

木部ハ濕氣ニ遇フトキハ自然ニ變形又ハ乾

第六百六十七

依リ布片或ハ束藁ニ水ヲ浸シテ拭フモノトス但シ塗料ヲ施シア

ヘシ若甚シク泥土附著シ容易ニ拭去リ難キトキハ兵器ノ種類ニ

ル部分ハ強ク擦ルヘカラス

銃床、木被、柄木、柄材等ニ附著セル污垢ノ除キ難キトキハ揮發

油或ハ「テレピン」油ヲ僅ニ含マシメタル布片ニテ拭ヒタル後

乾キタル布片ニテ十分油氣ヲ除クヘシ又木部ニ亞麻仁油ヲ塗リ

タルトキハ其ノ吸收スルヲ待チ乾キタル布片ニテ拭込ムヘシ

第六百六十八

附クルカ或ハ適宜塗料ヲ塗リ置クヲ可トス

第六百六十九

塗リ虫害ヲ豫防スルヲ可トス

木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

木部ヲ乾カスニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

木口ハ動モスレハ乾裂シ易キヲ以テ紙ヲ貼

五 手入上ノ注意

第七十一 手入ハ成ルヘク塵埃ノ飛揚セサル場所ニ於テ行フヘシ又革具ニ在リテハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

第七十二 手入ヲ行フニハ成ルヘク布類ヲ敷キタル臺上ニ於テスルヲ可トス但シ車輛等ニ在リテハ通常地上ニテ行フ

第七十三 手入ハ順序正シク丁寧ニシテ遺漏ナキヲ要ス殊ニ格納品ニ在リテハ手入ノ回数少ク且検査容易ナラサルヲ以テ一層注意セサルヘカラス

第七十四 手入ニ用ウル器具、布片等ニハ塵埃、土砂ノ附著ヲ避クヘシ

第七十五 手入ニ用キタル油布類ハ必ス規定ノ場所ニ置キ火災ヲ豫防スヘシ

第二章 格納

第七十六 格納品ヲ列ヘ又ハ吊リ或ハ托スルニハ其ノ保存、取扱竝重サヲ顧慮シ落ちサルコト、倒レサルコト、擦レサルコト及托架等ヲ損セサルコトニ注意スヘシ

第七十七 格納品ニハ覆ヲ施シ戶外ヨリ來ル外氣ニ曝スコトナク且塵埃ヲ防クヘシ

第七十八

塗油セル鐵部ハ油ヲ吸收スヘキ體ニ觸レシ
 メス且油ノ剝ケサル如ク格納スヘシ若鐵部ノ木部等ニ觸ルル場
 合ニハ豫メ其ノ部ニ防錆用油ヲ塗リ十分吸收セシメ置クカ又ハ
 油紙、「バラフィン」紙或ハ亞鉛鋅ヲ挾ミテ發錆ヲ豫防シ又他
 ノ金屬ニ觸ルル場合ニハ傷ツケサル様注意スヘシ
 塗油セル小金物ヲ結束スルニハ成ルヘク亞鉛^{アエンビキ}鍍鐵線ヲ用キ若麻
 絲ヲ用ウルトキハ金物ト同シ油ニ十分浸シタルモノヲ用ウヘシ
 第七十九 革條類ヲ吊下クルニハ成ルヘク之ヲ曲ケサ
 ルコト及遊環革ヲ落ササルコトニ注意スヘシ但シ遊環革ハ別ニ
 纏メテ其ノ附近ニ置クモ妨ケナシ

長大ナル革條類ヲ吊ルニハ時上下ヲ換フルヲ可トス

麻絲又ハ紐類ヲ以テ革具ヲ吊ルニハ成ルヘク之ヲ附屬金具ニ通
 スヲ可トス若金具ナキトキハ重サノ爲絲又ハ紐ノ革ニ喰込マサ
 ル如ク加減スシ

第八十

毛布類ハ「ナフタリン」ヲ插入シ通常箱内ニ
 密閉格納ヲ爲スモノトス又革具類ニ在リテモ此ノ方法ニ依ルヲ
 便トス
 密閉格納ヲ爲スニハ空氣ノ乾燥セル季節（概ネ十月ヨリ翌年三
 月ニ至ル間）ニ於テ綿密ニ手入ヲ行ヒ「サリチトル」酸ヲ混シ
 タル糊ニテ確實ニ目貼ヲ爲シ外氣ノ侵入ヲ防クヘシ

毛布ノ格納替ヲ爲ストキハ舊折目ヲ避ケテ折疊ムヘシ

第百八十一 長キ柄ヲ有スルモノハ成ルヘク架ニ托シテ

吊ルカ又ハ水平ニ置キテ其ノ屈曲ヲ避クヘシ

塗料ヲ施シタル木製品ハ通常枕木ノ上ニ置キ且成ルヘク積重ネ

サルヲ可トス若已ムヲ得ス積重ヌルトキハ相互ノ間ニ挾木ヲ置

キ且時時上下ヲ置換フヘシ

第百八十一 蟲害ヲ受ケタル毛製品、木製品等ハ殺蟲後ト

雖一時他ノモノト隔離シテ格納シ害蟲ノ撲滅ヲ確ムルヲ可トス

第百八十二 格納倉庫ニ關シテハ概ネ左ノ事項ニ注意ス

ヘシ

一 庫内ハ常ニ清潔ナラシメ塵埃及濕氣ノ侵入スルヲ防クヘ

シ

二 庫内ニ於テハ手入ヲ行ハサルヲ可トス若已ムヲ得ス手入

ヲ行フトキハ塵埃ヲ他ノ格納品ニ被ラシメサル爲幕等ニテ

手入場所ヲ區劃スルヲ要ス

三 窗戸ハ乾燥ノ日特ニ換氣ヲ行フ場合ノ外平素之ヲ閉チ入

口モ亦出入スルトキノ外之ヲ閉ツルモノトス

四 鼠ノ侵入ヲ防キ鼠害ヲ豫防スヘシ

五 日光ノ直射ヲ受クル窗戸ニハ日覆ヲ用ウヘシ

第三章 分解及結合

第百八十四 手入、検査及修理等ノ爲兵器ヲ分解スルニハ能ク其ノ制限ヲ守リ必要以外ニ他ノ部分ニ及ホスヘカラス

第百八十五 分解及結合ハ順序正シク行ヒ損セサルコト、汚ササルコト、混セサルコト、失ハサルコト等ニ注意スヘシ之カ爲分解ニ方リテハ各部品ヲ順序良ク列ヘ又結合ニ方リテハ上下、左右等ヲ誤ラサルコト肝要ナリ

第百八十六 螺子ヲ緊ムルニハ右ニ廻シ之ヲ戻スニハ左ニ廻スヲ通常トス而シテ手力ノ及ハサル場合ニハ螺廻、螺鑰ヲ用ウルモ過度ニ緊ムヘカラス

數箇ノ螺子ニテ螺著ケタルモノヲ緩メ或ハ緊ムルニハ相對スル

螺子ヲ交互ニ同量ツツ廻スヘシ又螺子ヲ脱シタル場合ニハ其ノ孔ニ相當セル螺子ヲ他ノモノト混セサルコトニ注意スヘシ
螺子ヲ緩メムトスルニ方リ固クシテ抜ケサルモノハ少量ノ油ヲ滴シ暫時ノ後之ヲ廻スヘシ

第百八十七 割栓ヲ箆メタルトキハ其ノ端ヲ開キ置クヘシ

第百八十八 分解及結合困難ナルトキハ強テ之ヲ行フコトナク工長ノ指揮ヲ受クヘシ

第百八十九 分解及結合ハ成ルヘク布類ヲ敷キタル臺上ニテ行フヲ可トス

ニテ行クヤ西トス

第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土

トシテ其ノ耐熱ト受クヘシ

第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土

第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土

第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土

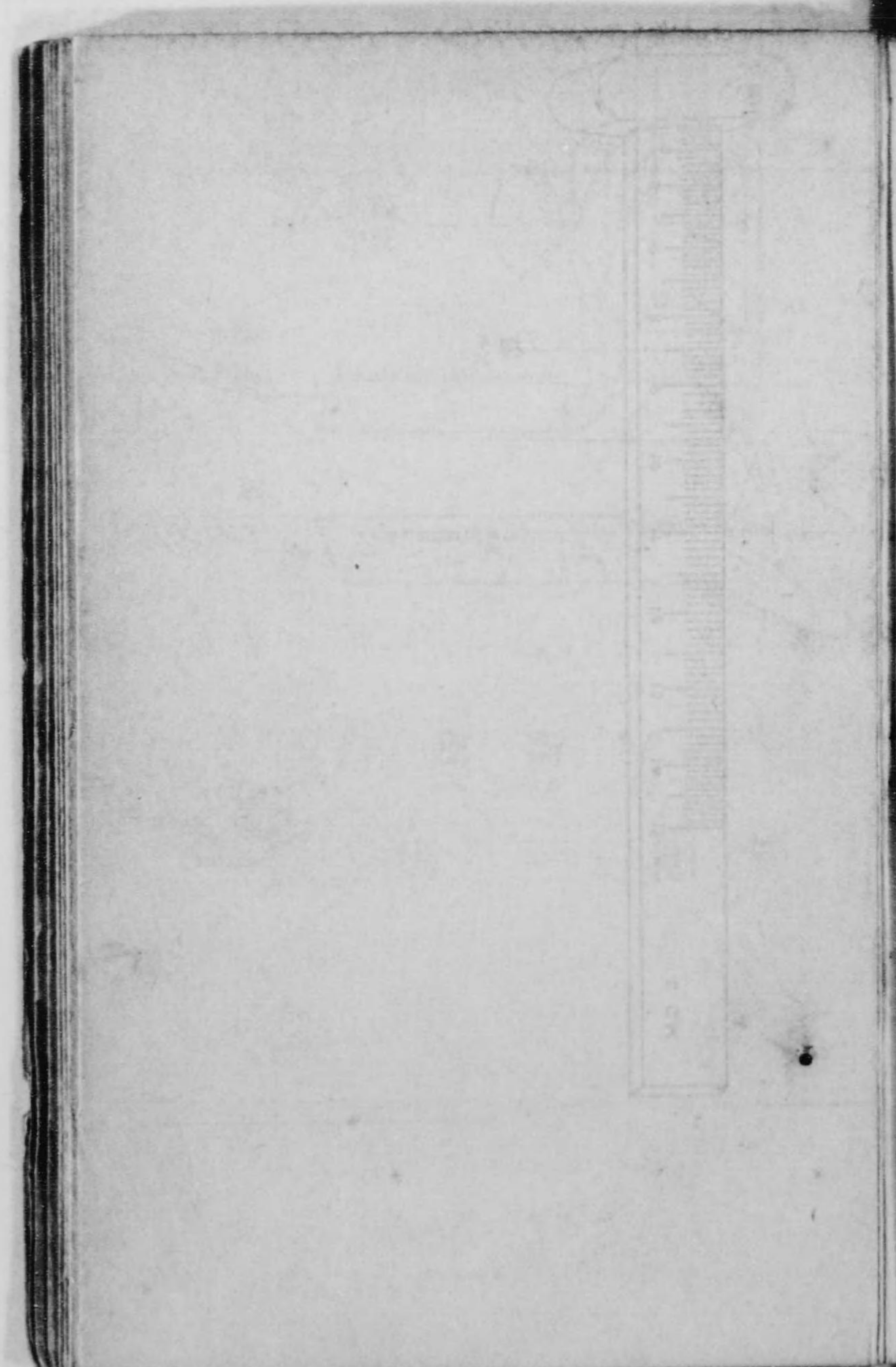
第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土

第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土

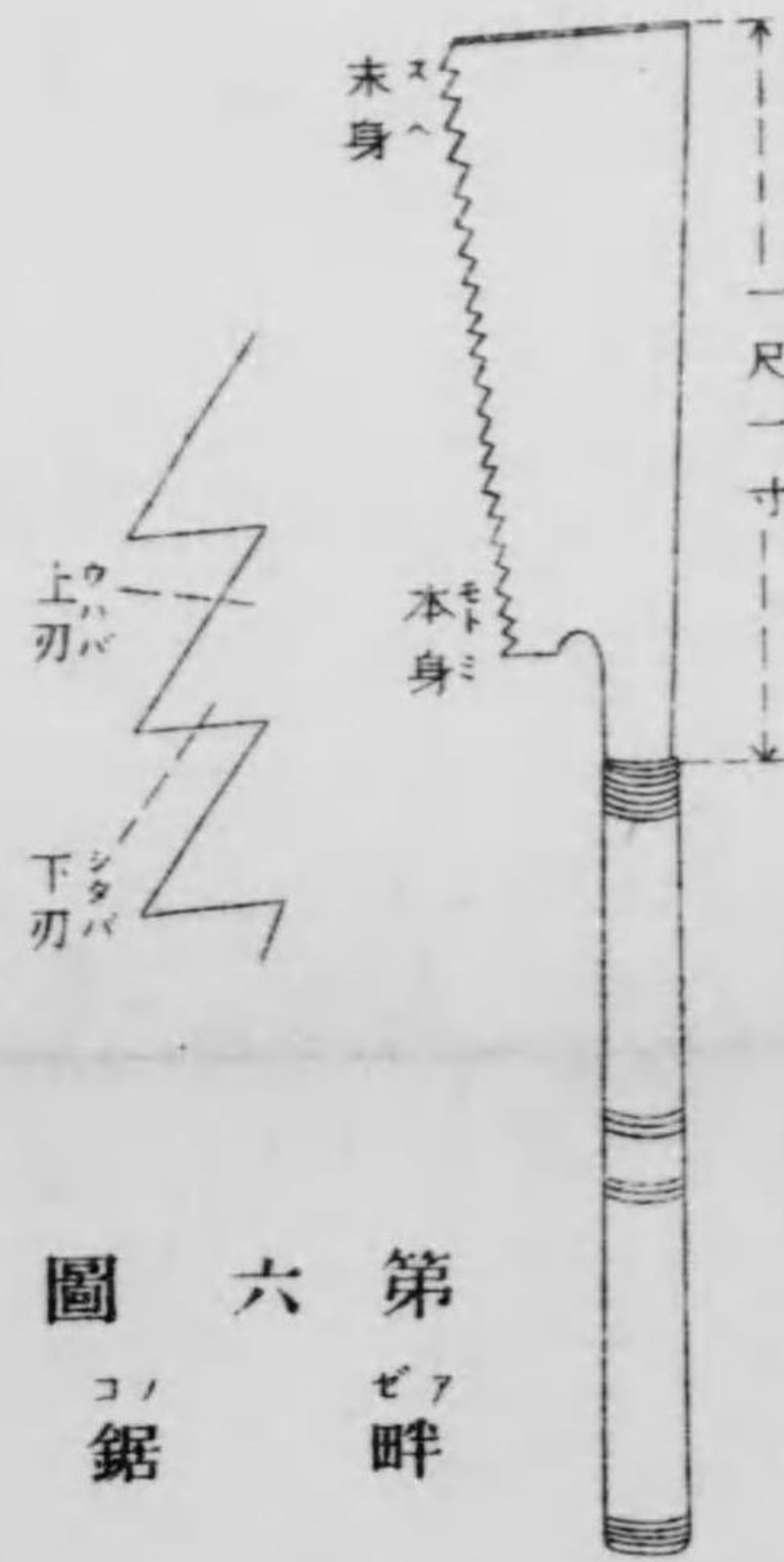
木工教程

終

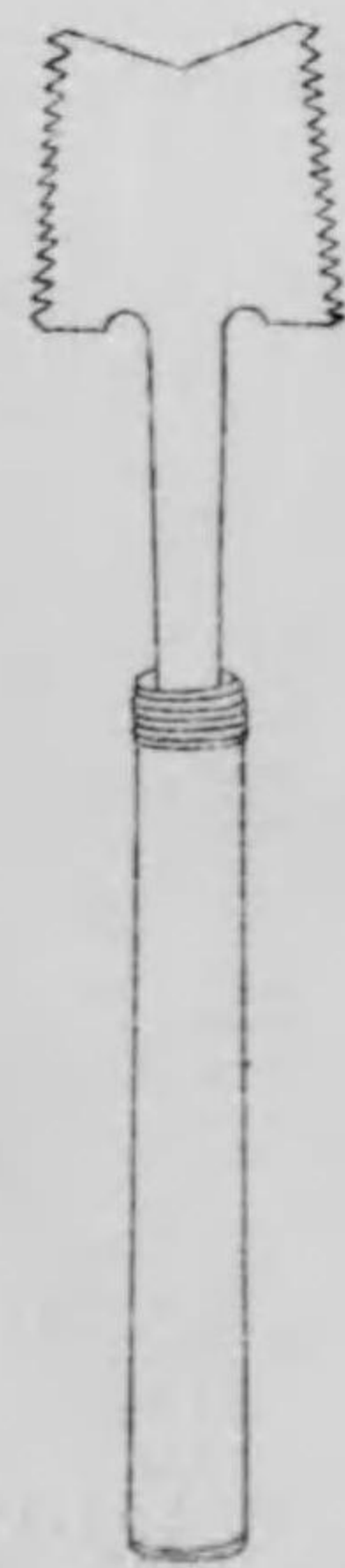
第百八十八 衣類又組合ハ其ノ中亦以テ煉カタル基土



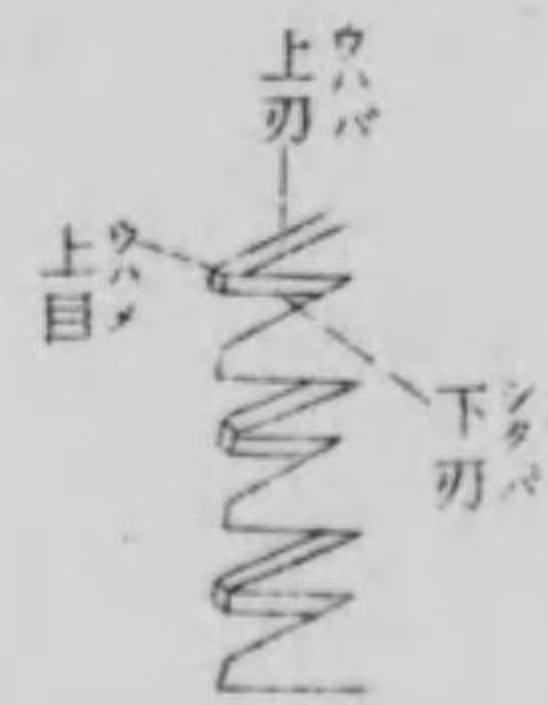
圖四第
コノ 尺 縦一尺
鋸 縦一尺



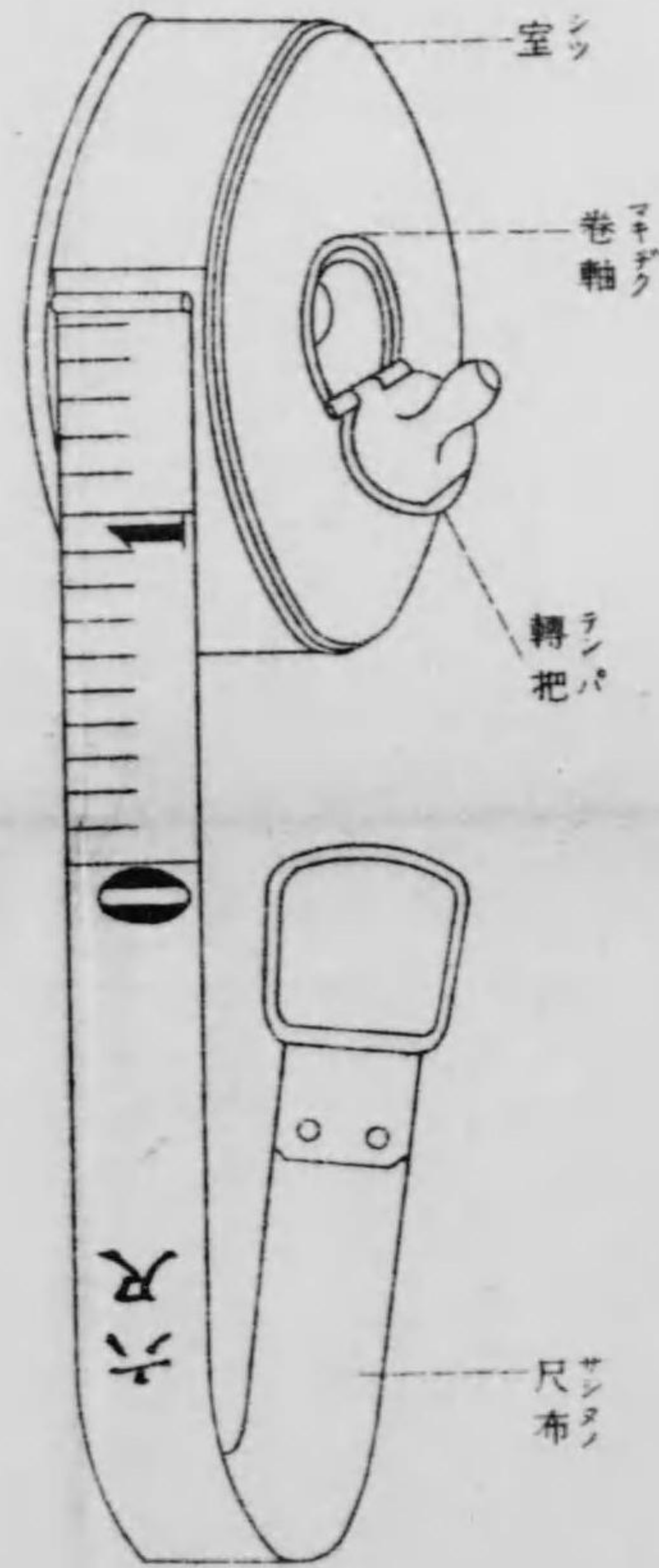
圖六第
コノ 鋸
ハ 鋸



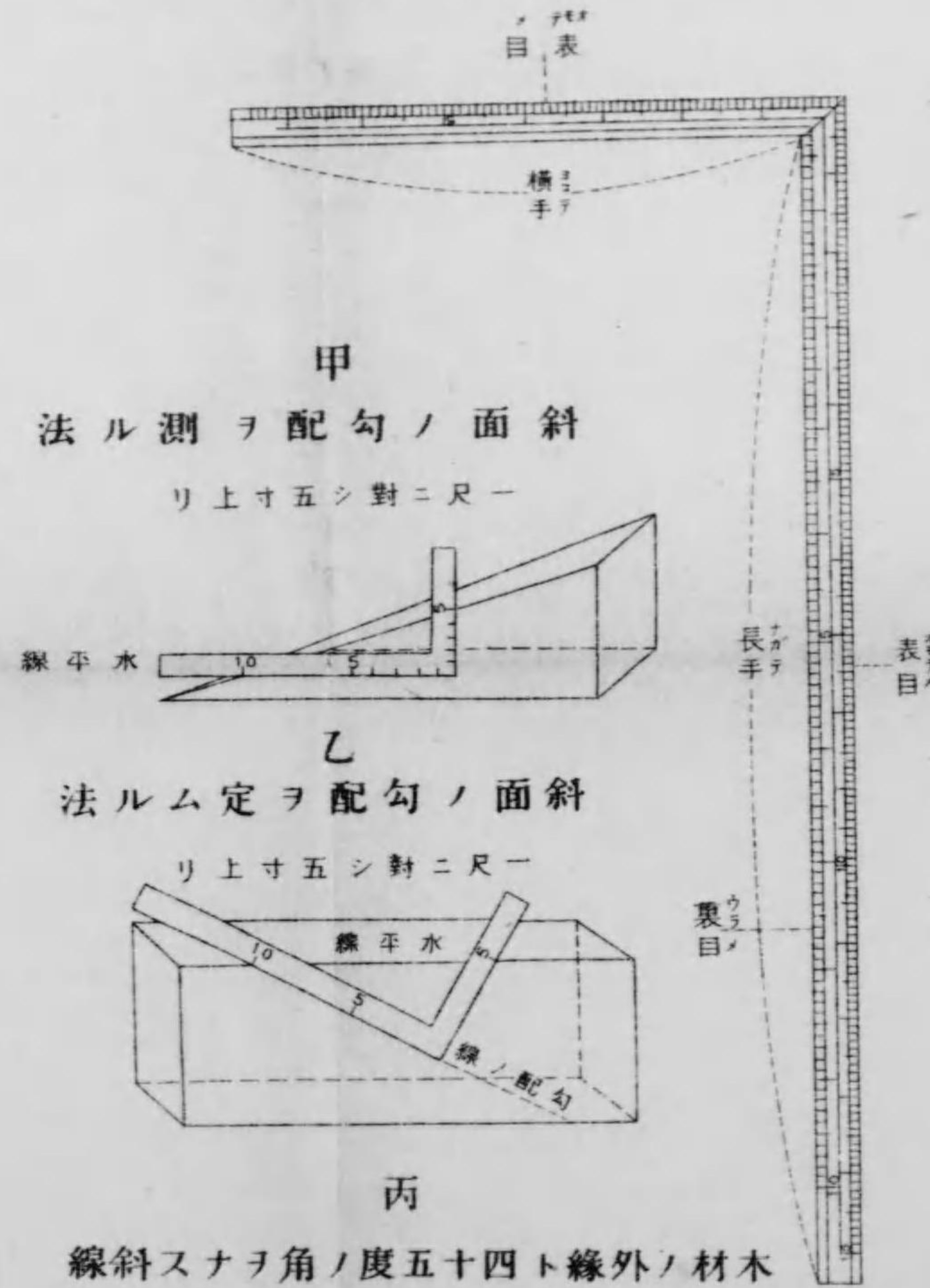
圖五第
コノ 鋸 横
ハ 鋸 横



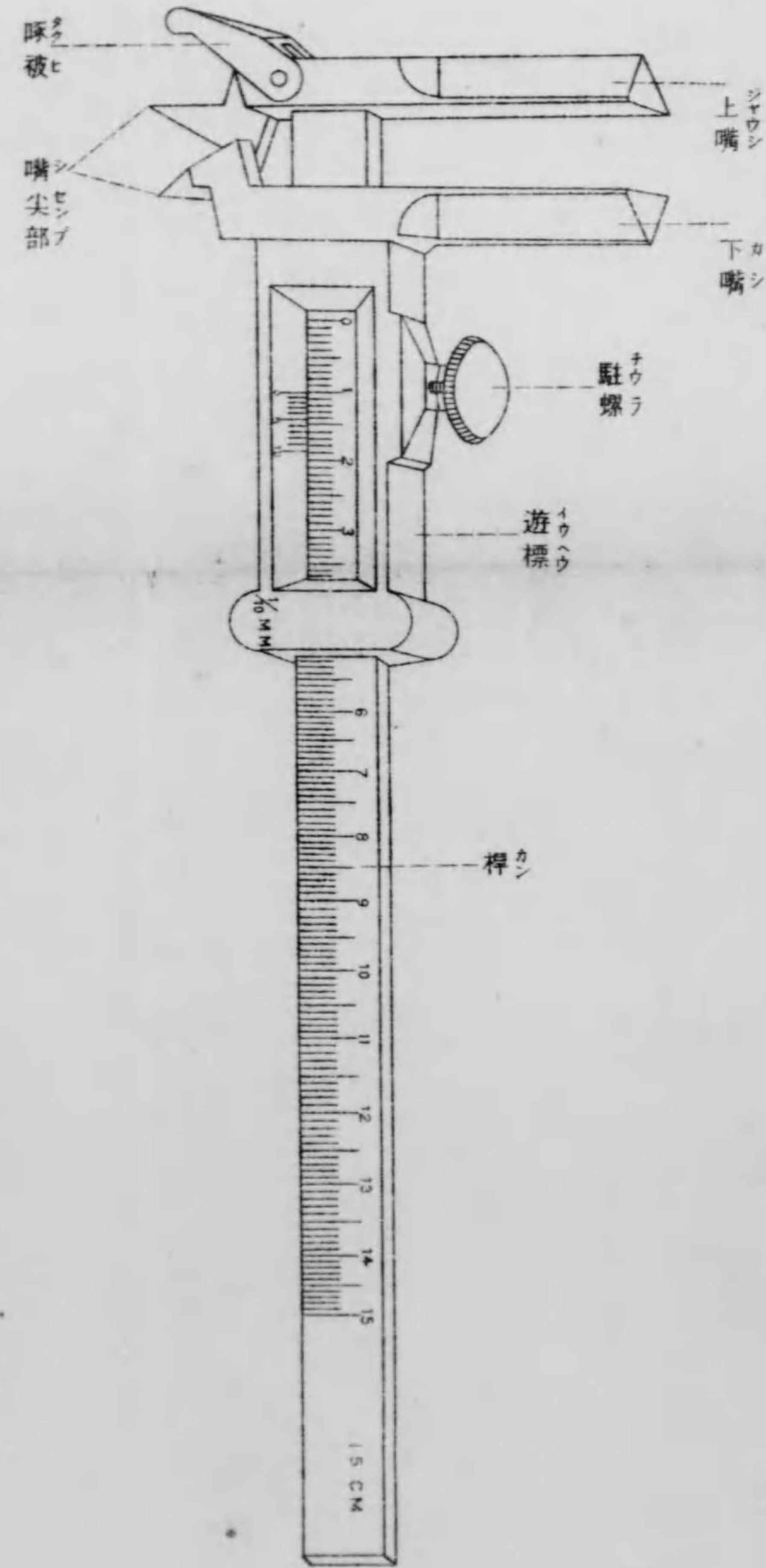
圖三第
クヤジ キマ
尺 卷 米 二



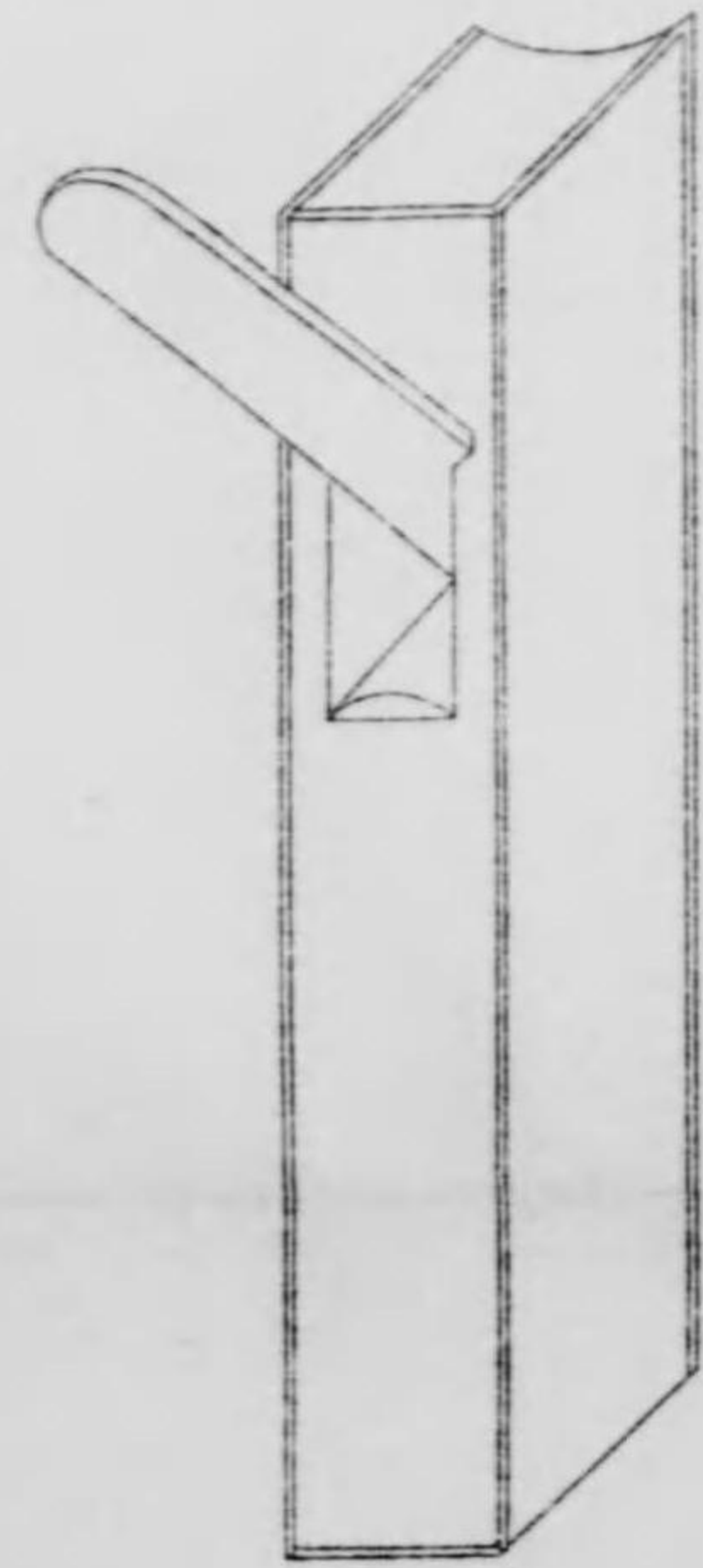
圖二第
ネボ 尺
リガ 曲
目 表



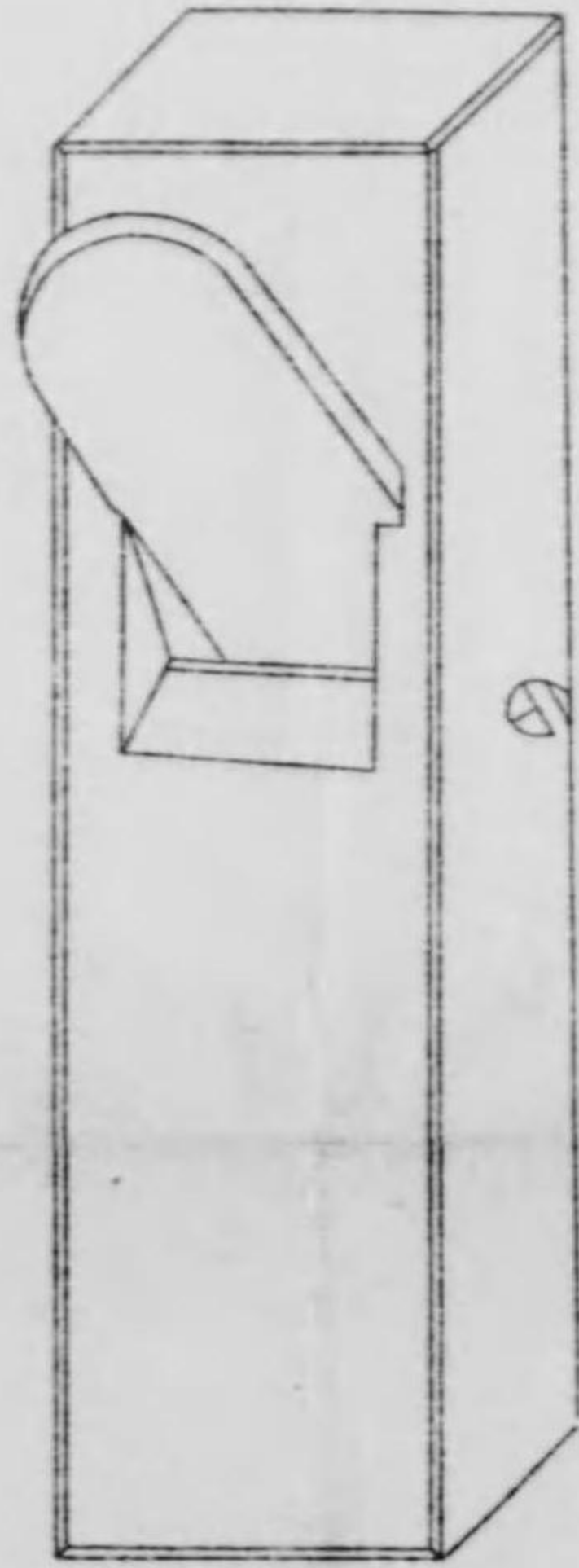
圖一第
クヤジ ウヘ ウイ
尺 標 遊



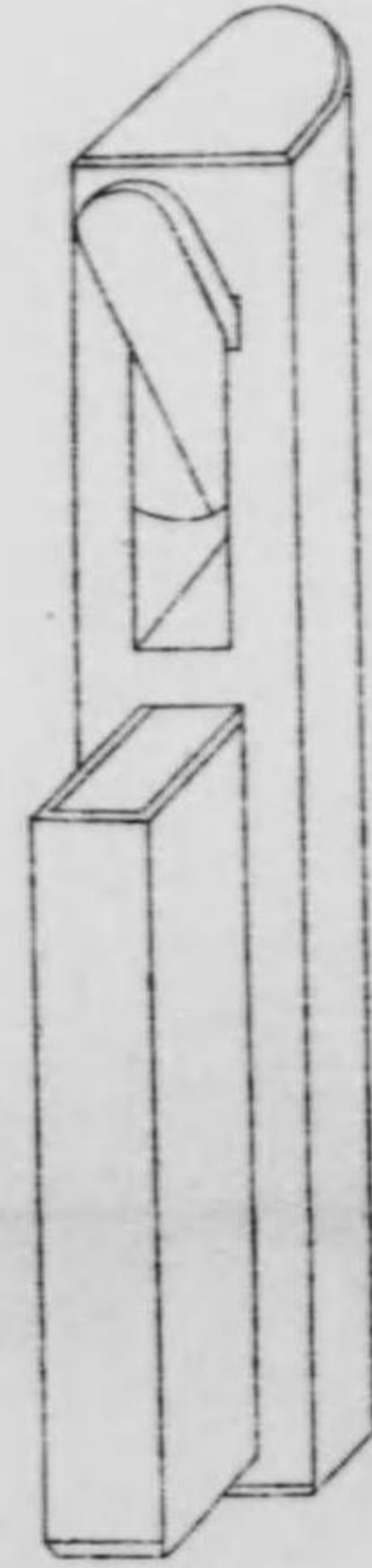
圖三十第
ナンガ 鉋
ウバ 棒



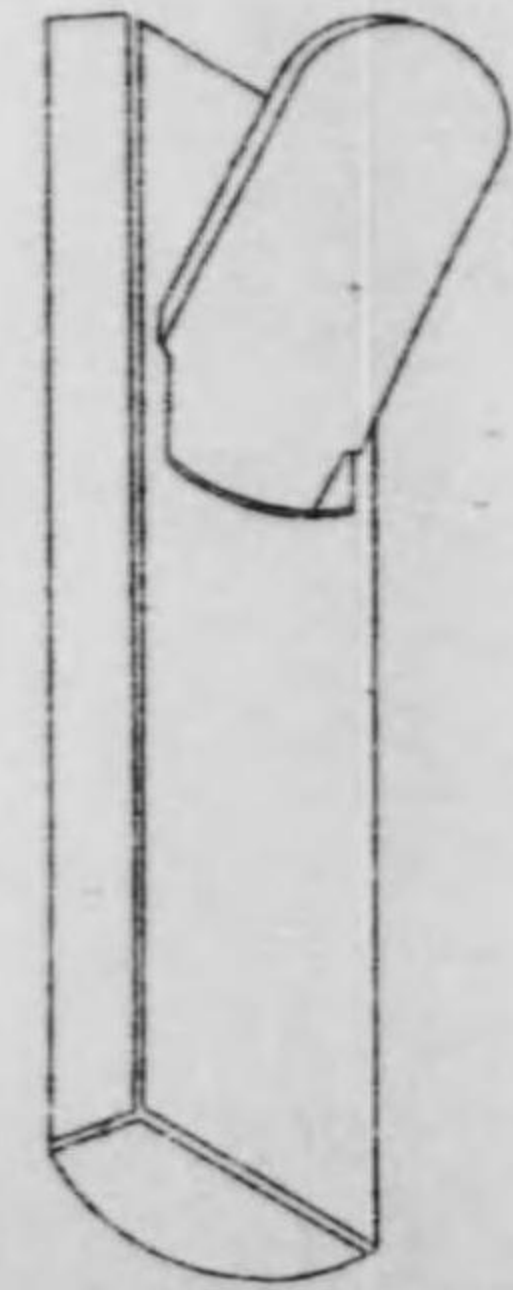
圖二十第
ナンガ 鉋
ハキ 際
リダヒ 左



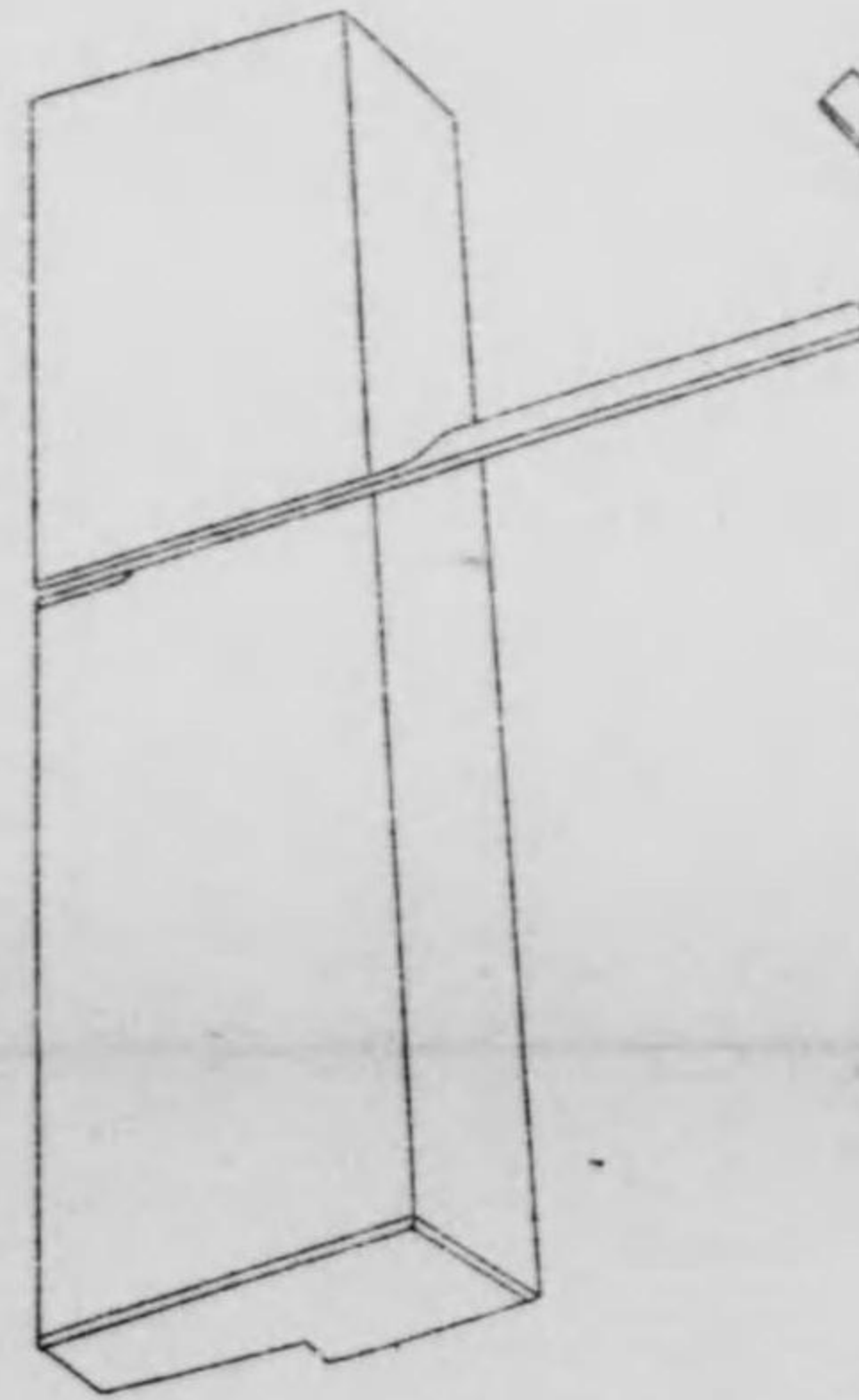
圖一十第
ナンガ 鉋
コ 弧



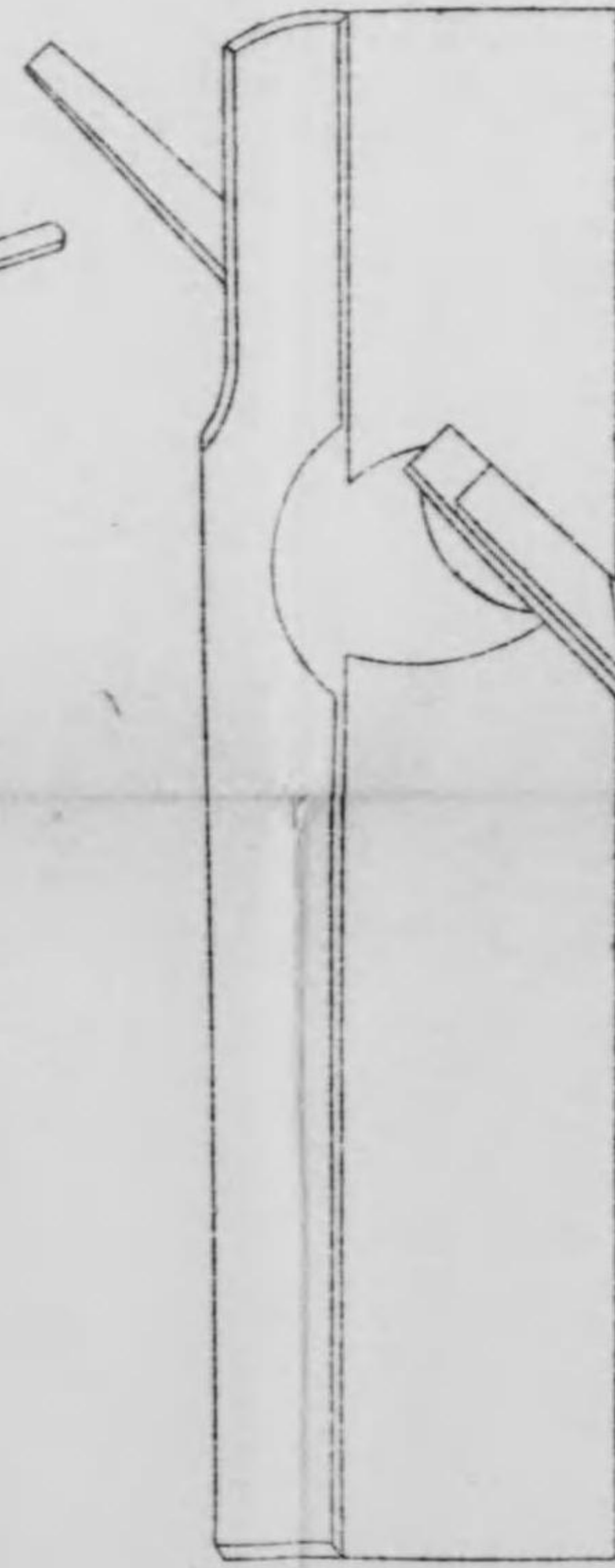
圖十第
ナンガ 鉋
ルマ 圓
トツ 外



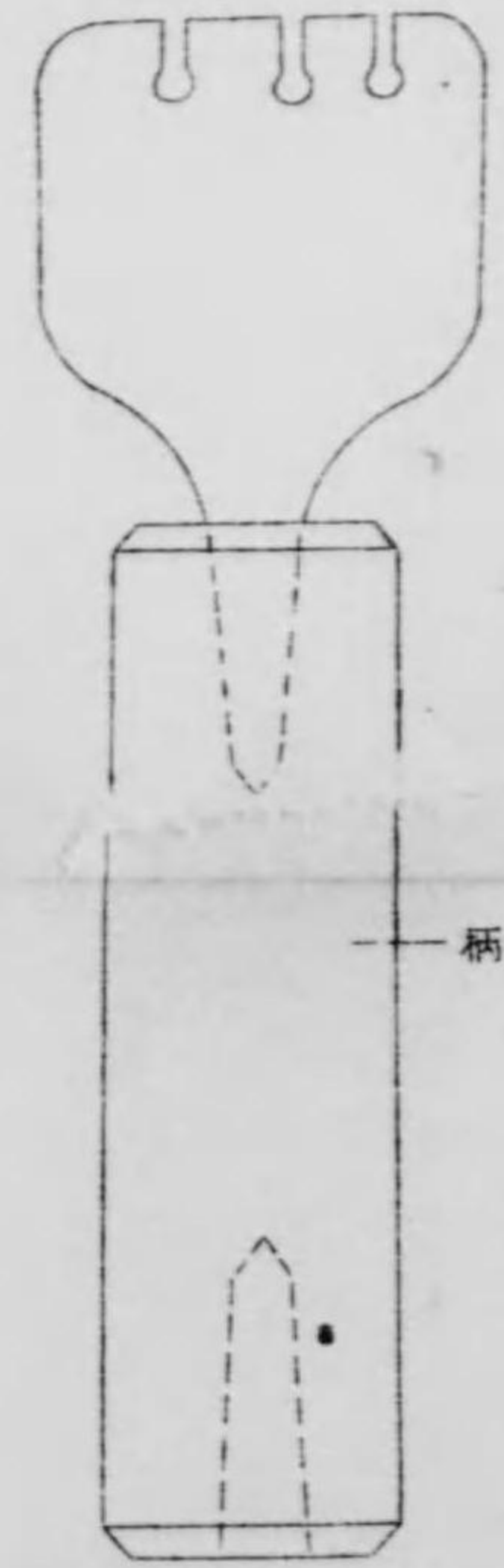
圖九第
ナンガ 鉋
キツ 側
リダヒ 左



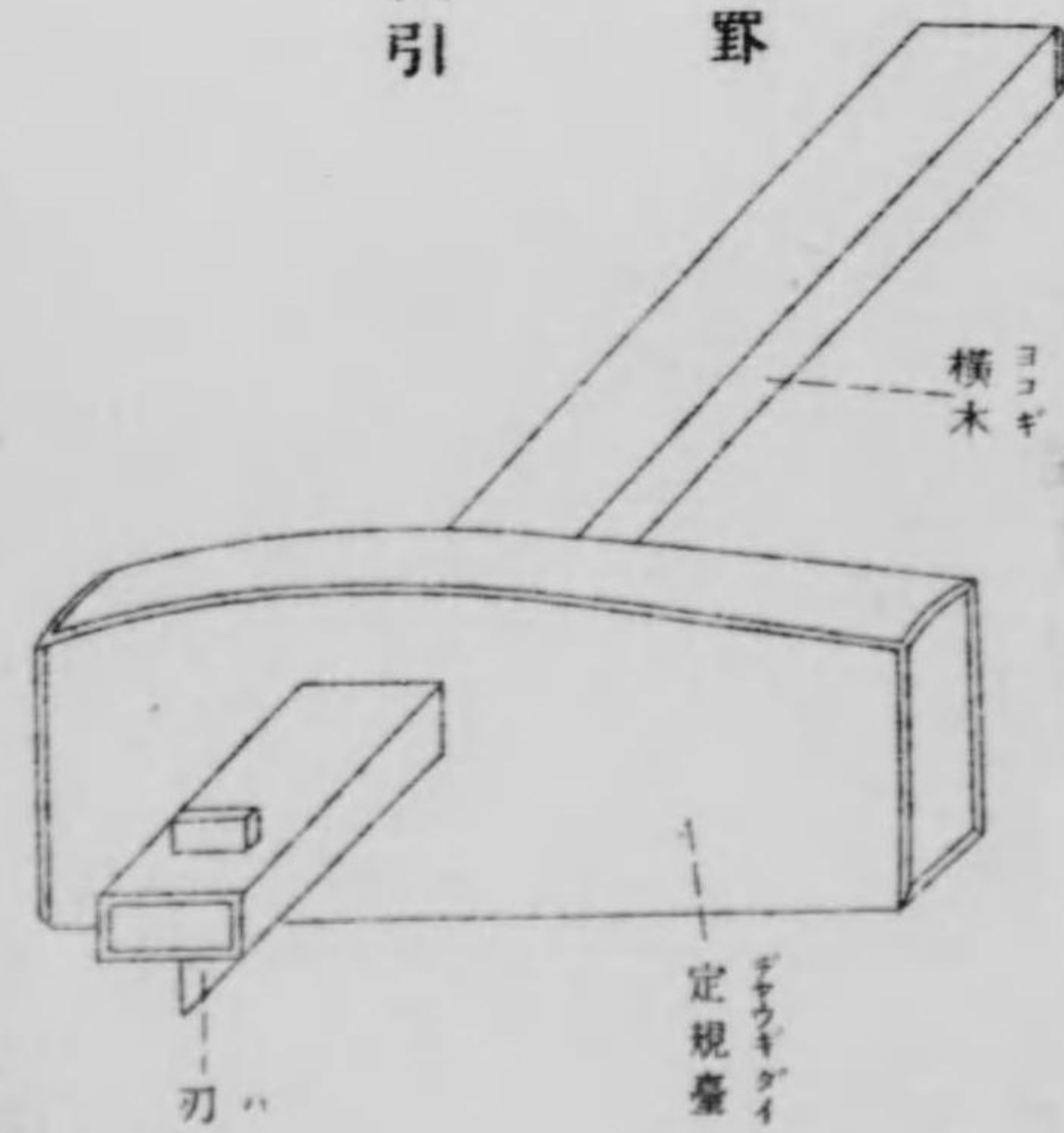
圖八第
ナンガ 鉋
ゾミ 溝



圖七第
リフ 振
目



圖五十第
キビ 引
イケ 罫



圖四十第
ボツ 壺
ミス 墨

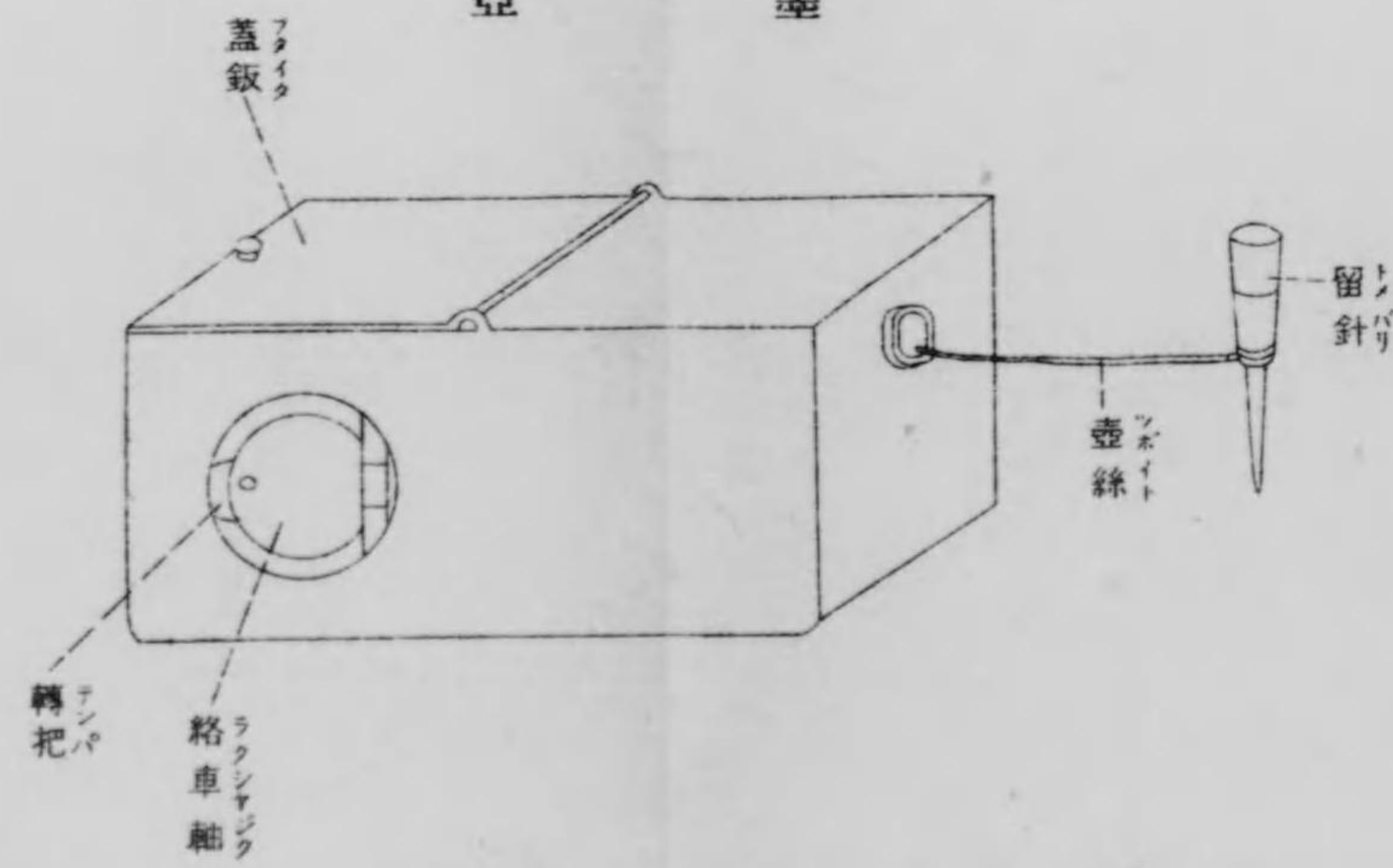


圖 十 二 第

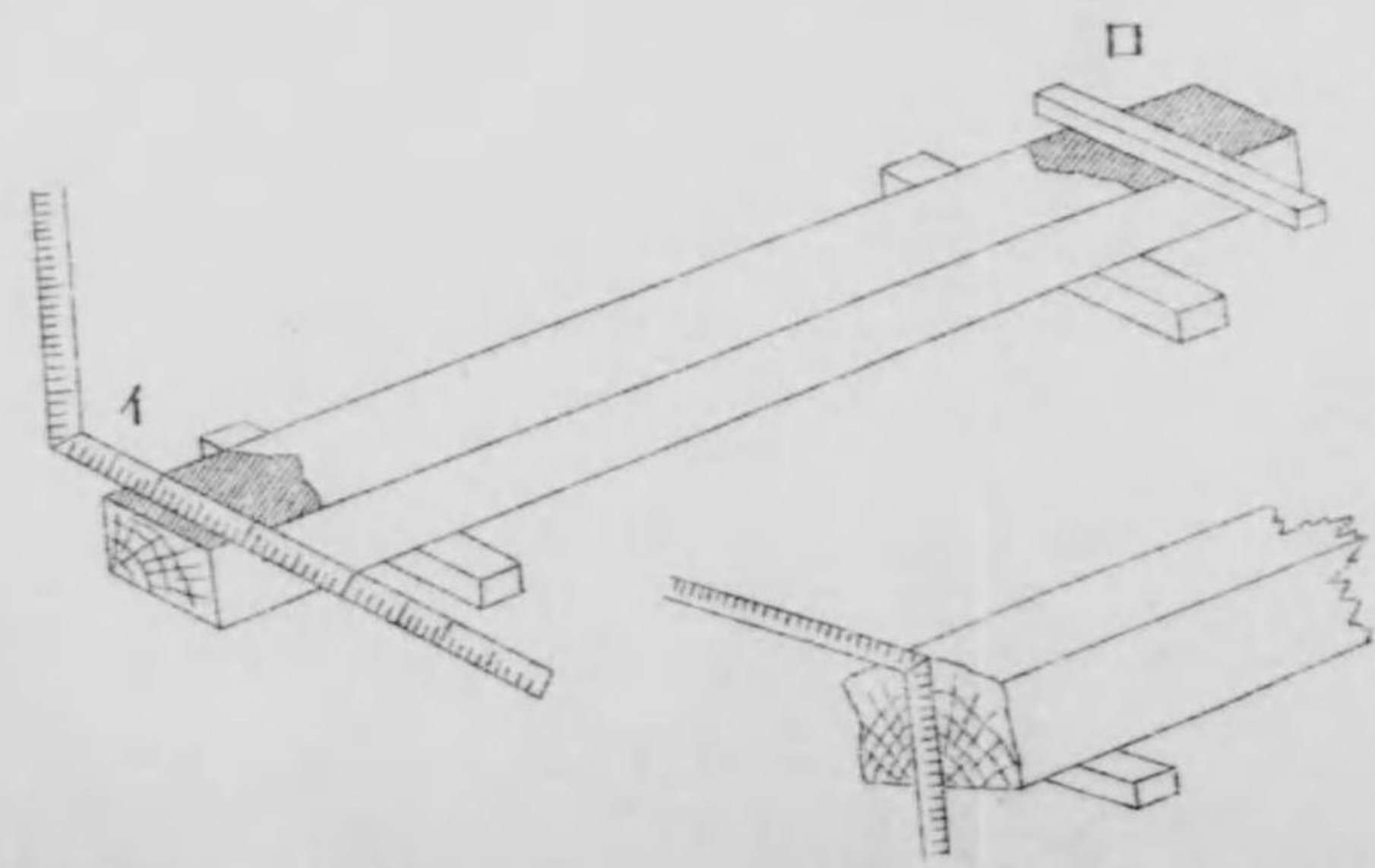


圖 九 十 第

カ ラ イ ザ ジ ヲセ
鑰 螺 在 自 小

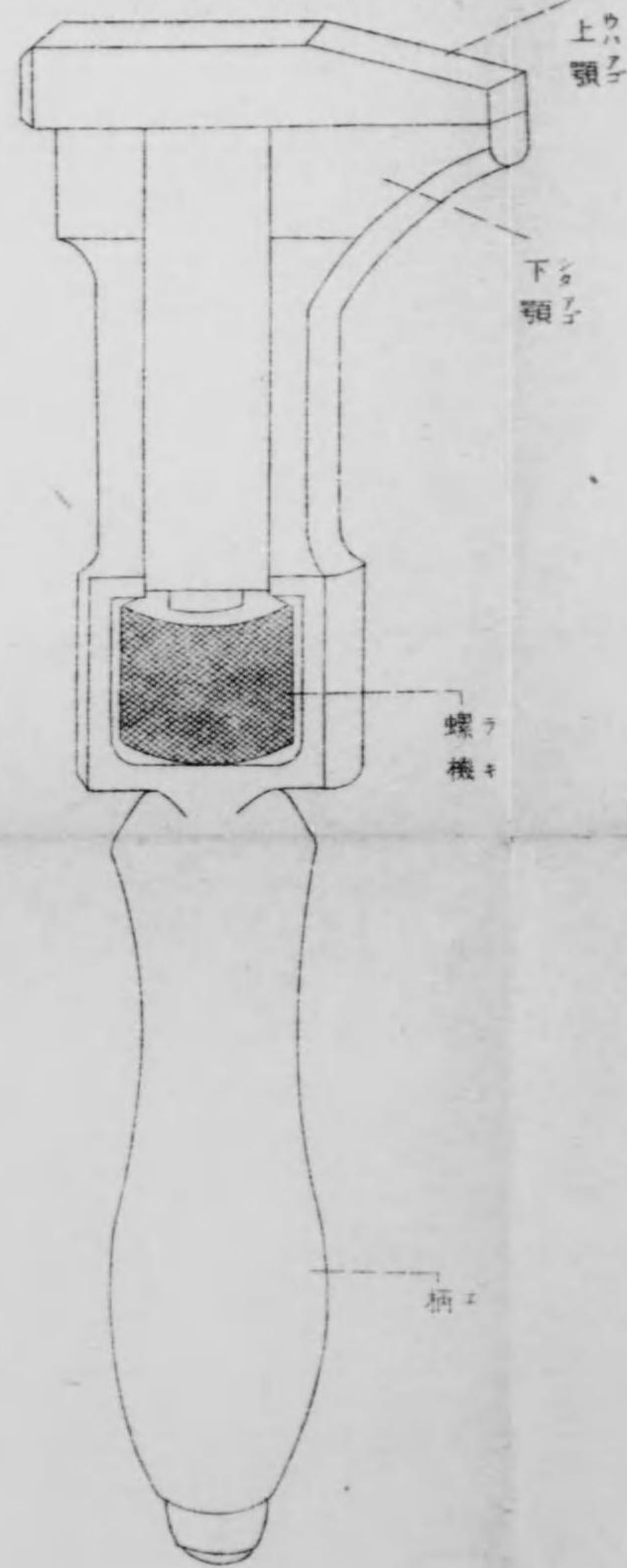


圖 八 十 第

イ ヲ ウ コ ク ミ
臺 工 木

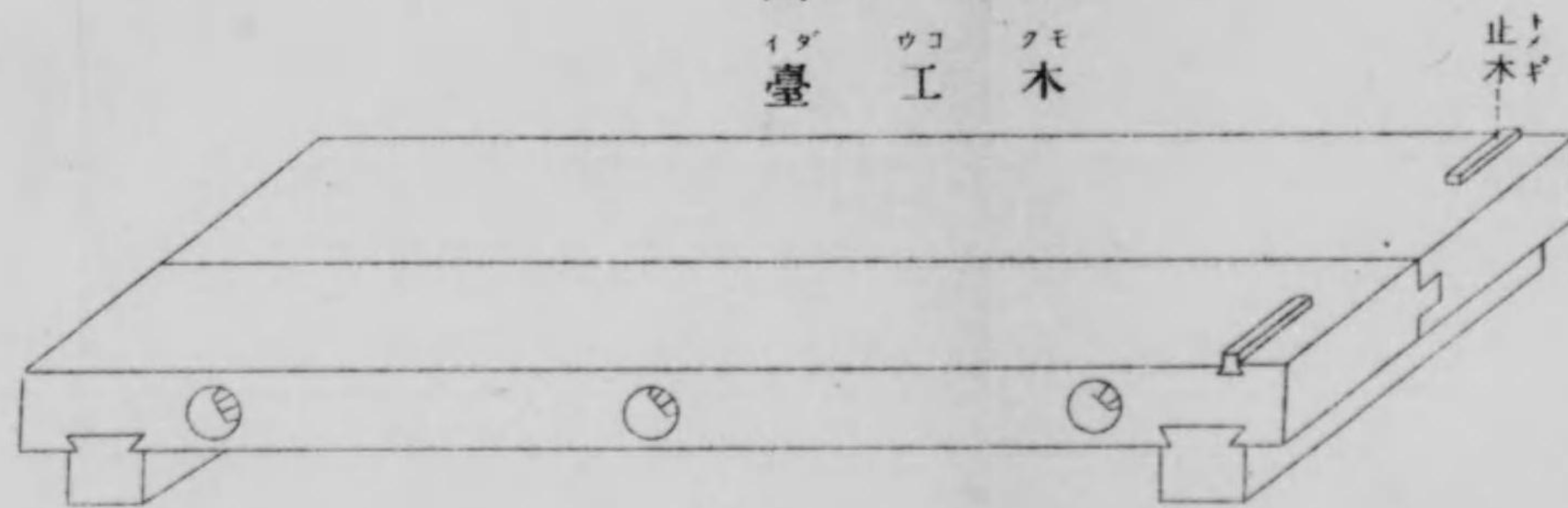


圖 七 十 第

リ ギ ジ ネ バ カ
錐 螺 刃 角

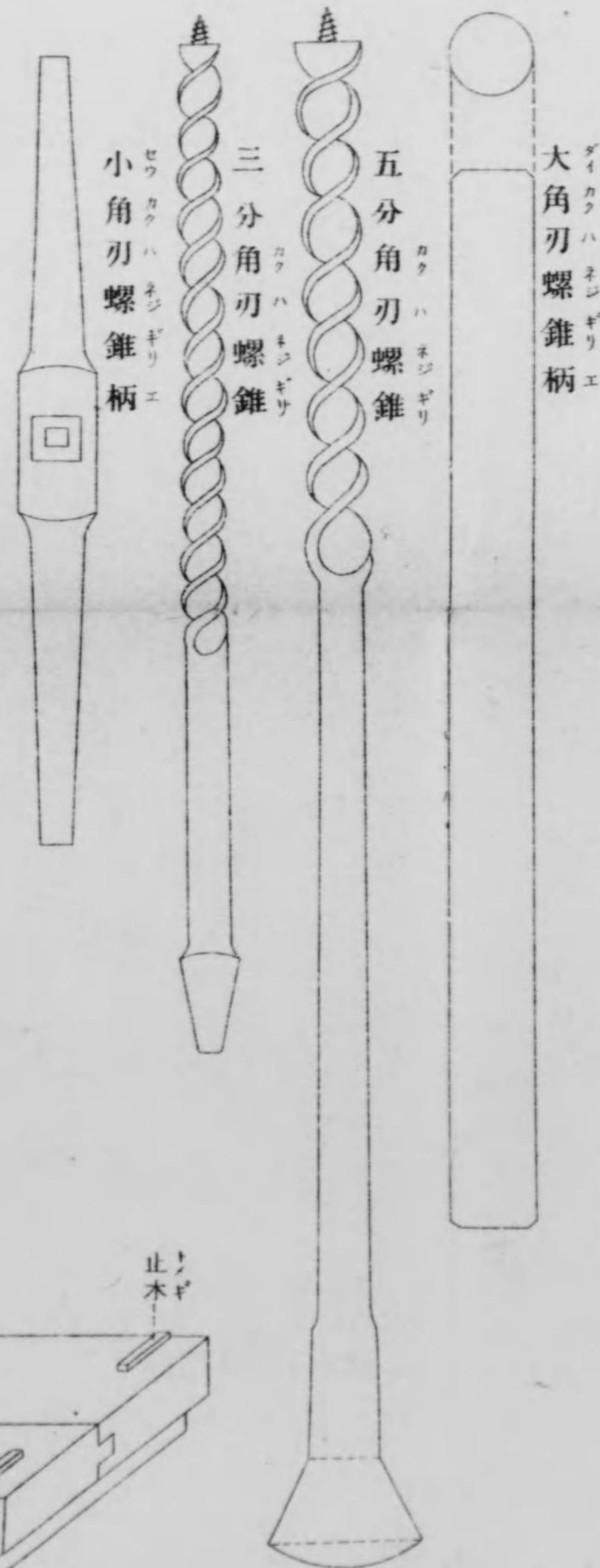


圖 六 十 第

イ ペ ン デ
柄 轉

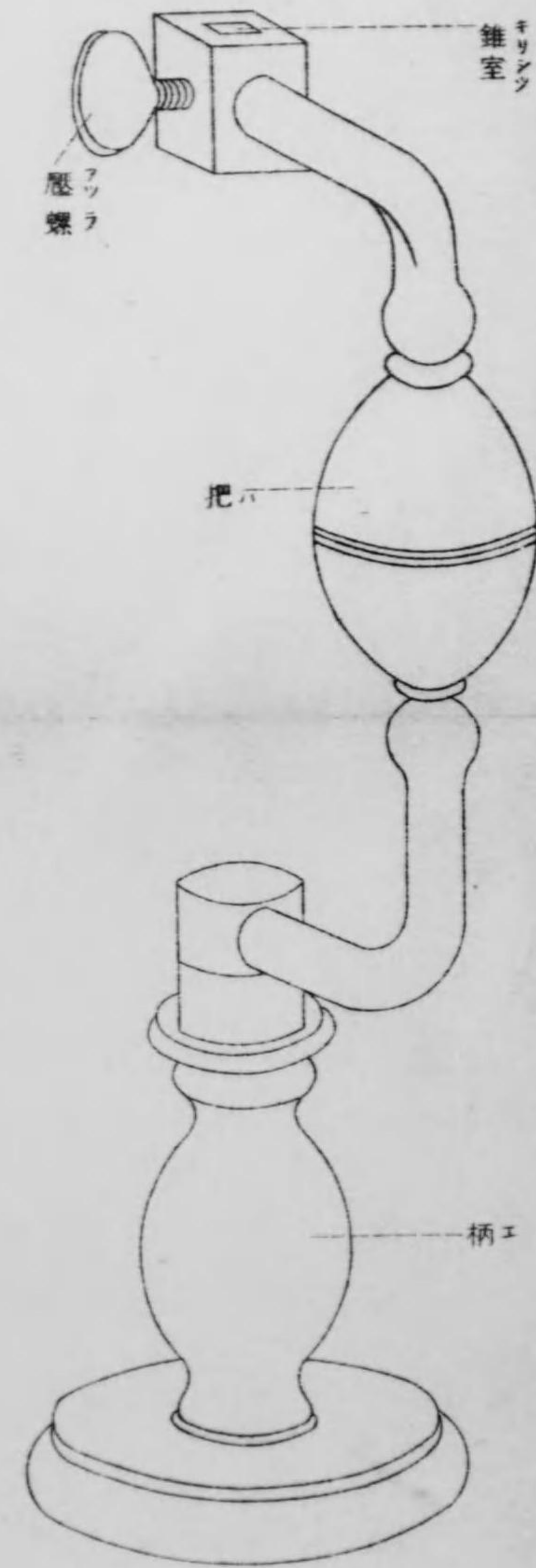
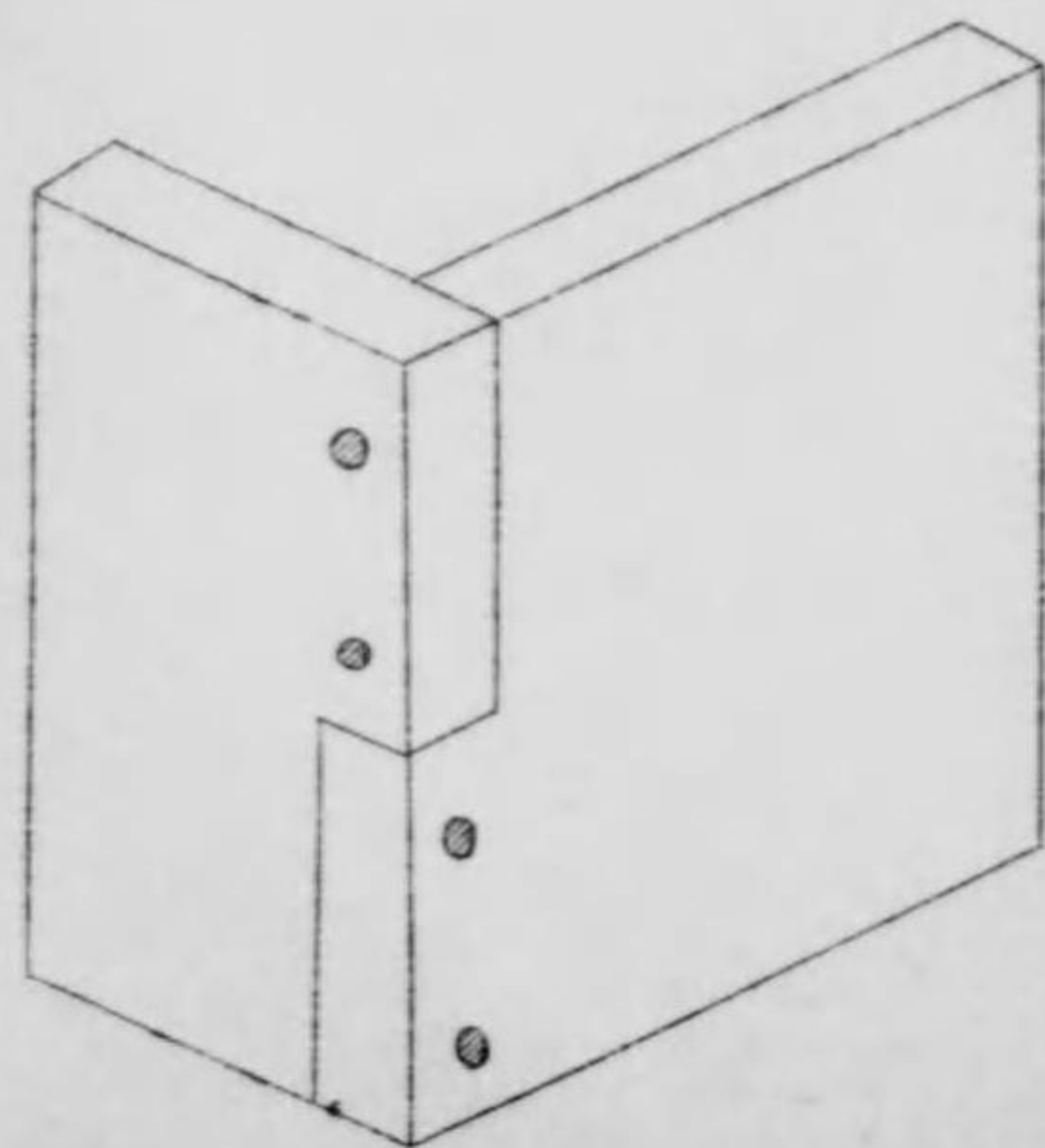
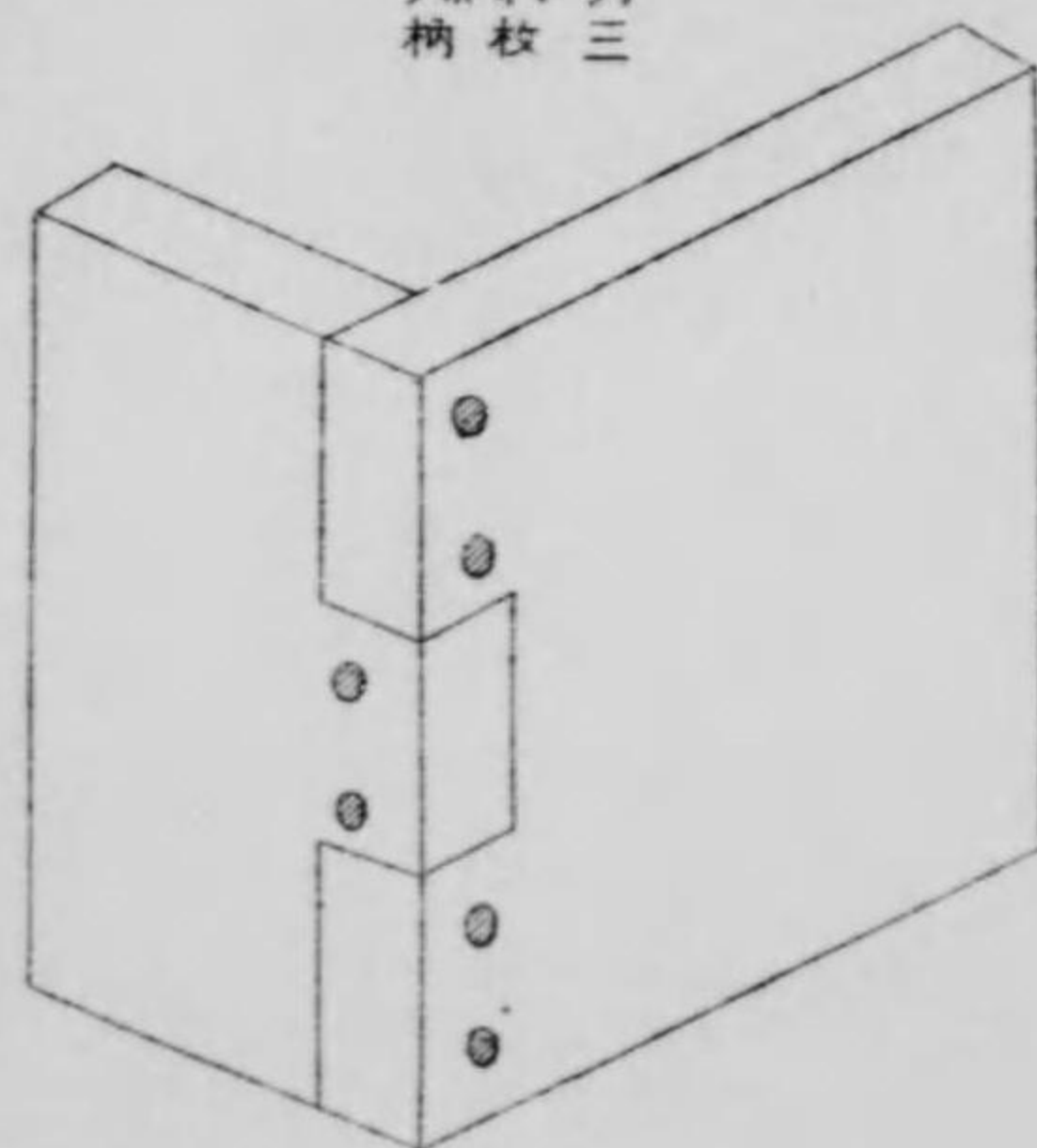


圖 三十二 第

ギカ 17
缺 相



ゾルイソフ
柄 枚 三



ソ差 77
蟻

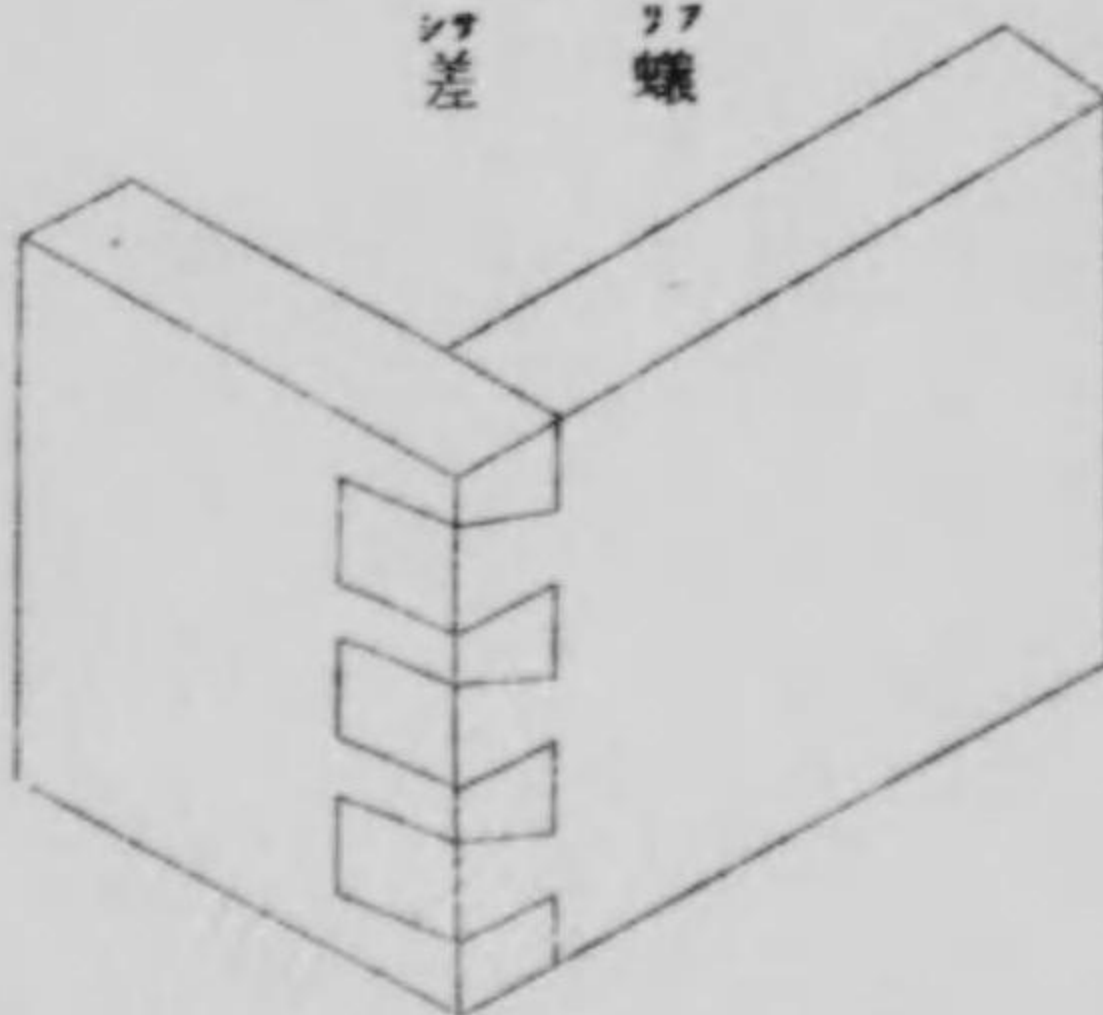
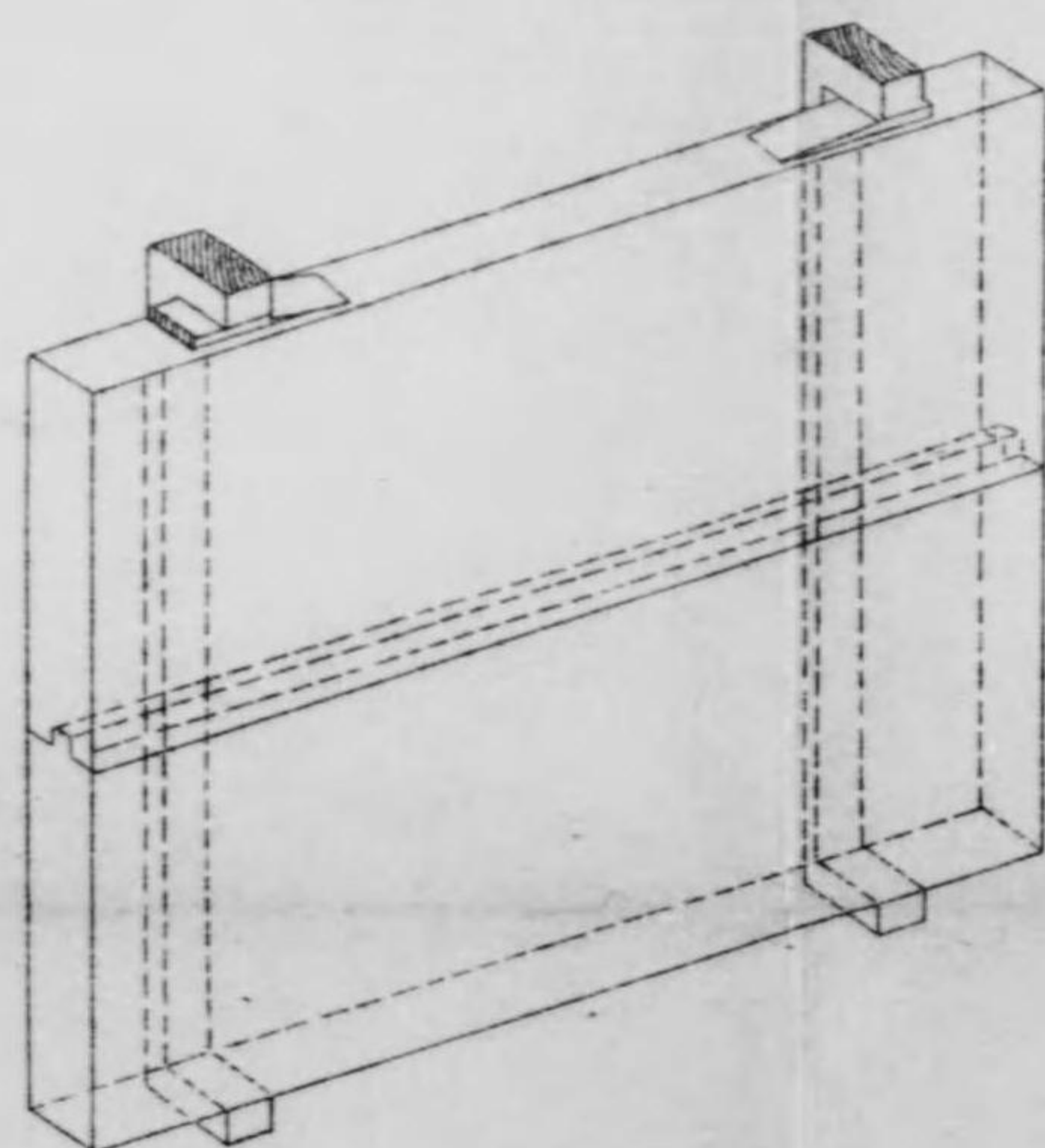


圖 二十 二 第

乙
ギハ ロク バツ
接 口 燕



甲
ギハ キサ
接 核



乙

ギハ キサ ヒトキ
接 核 雇

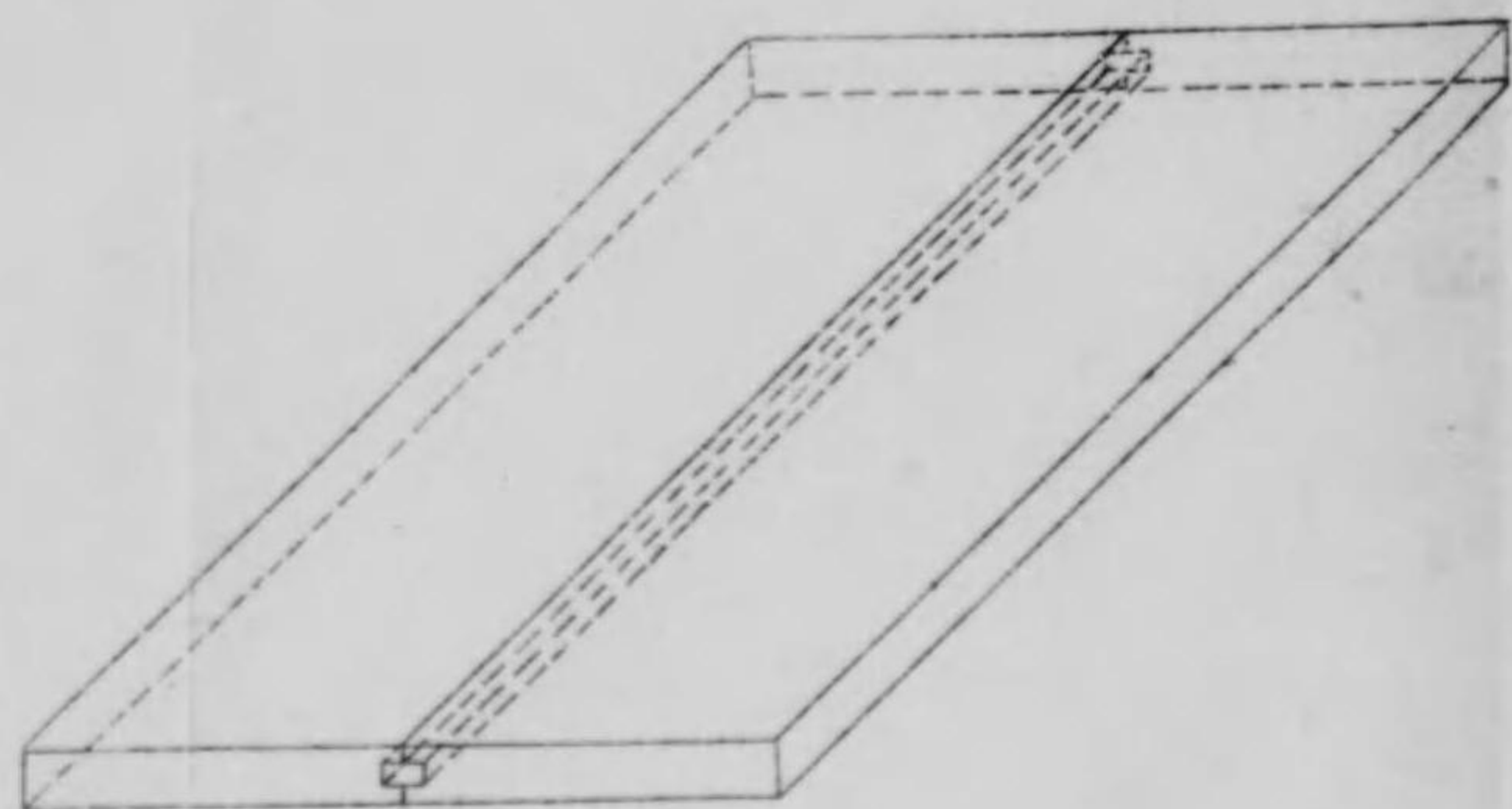
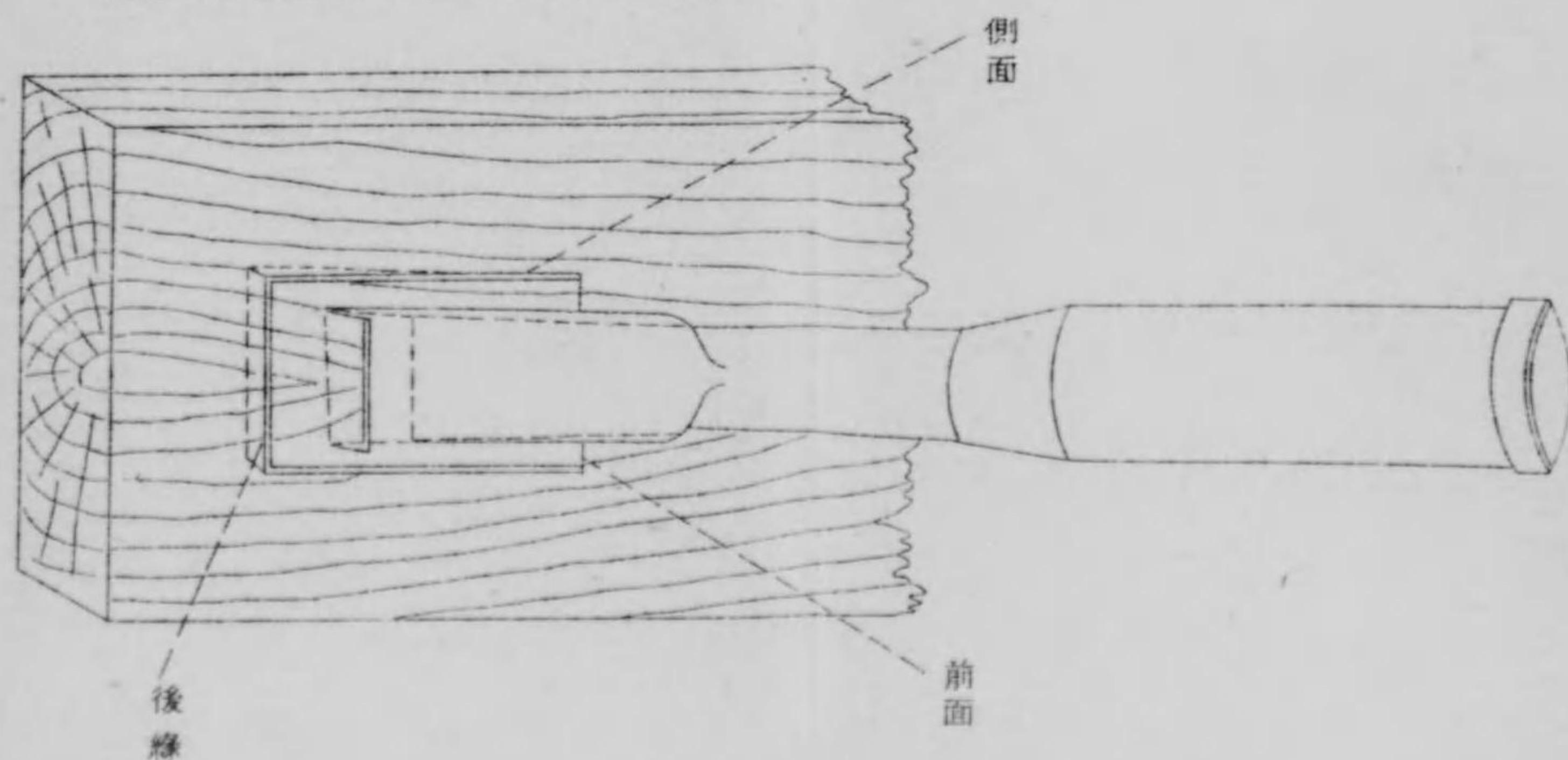
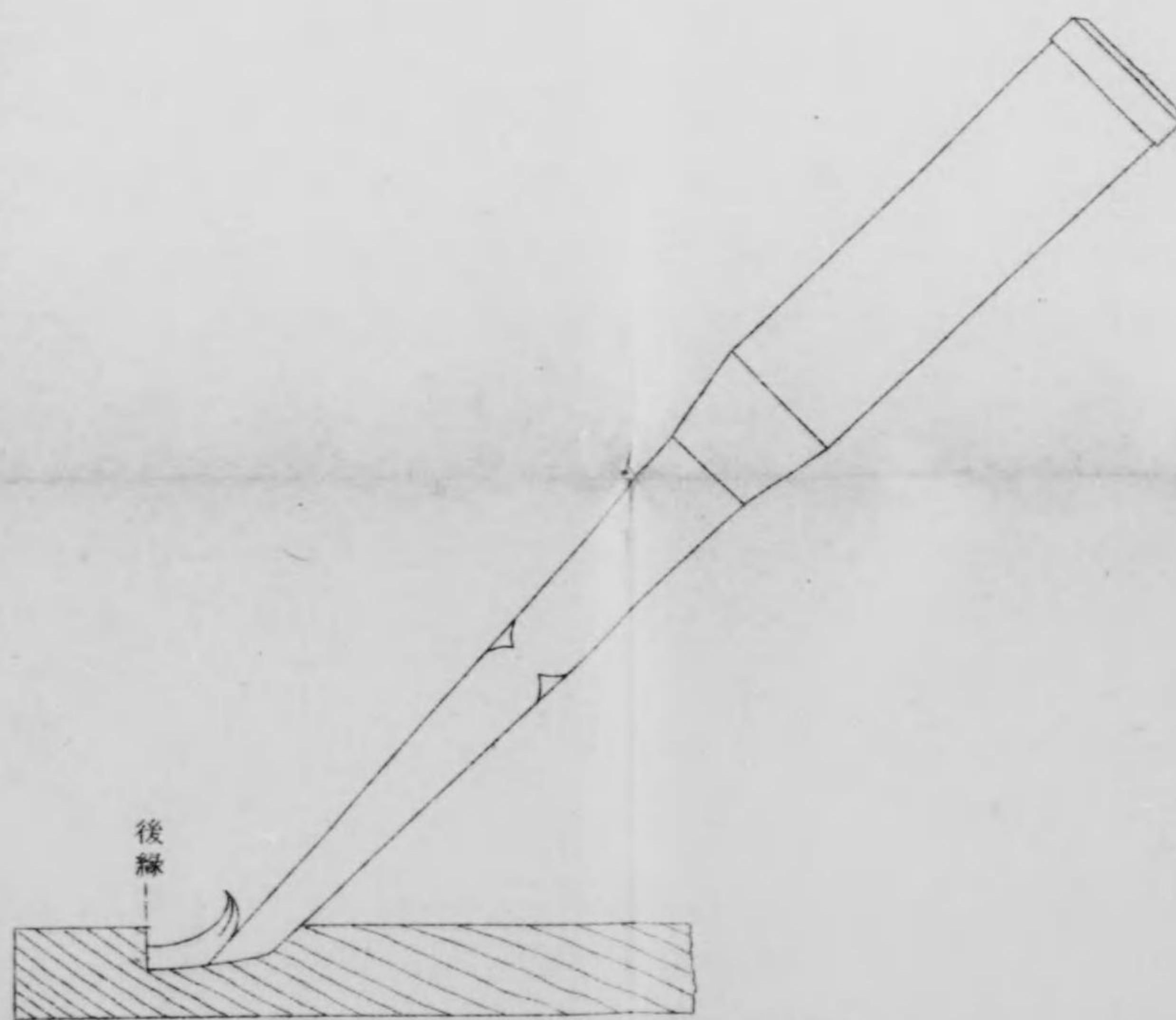
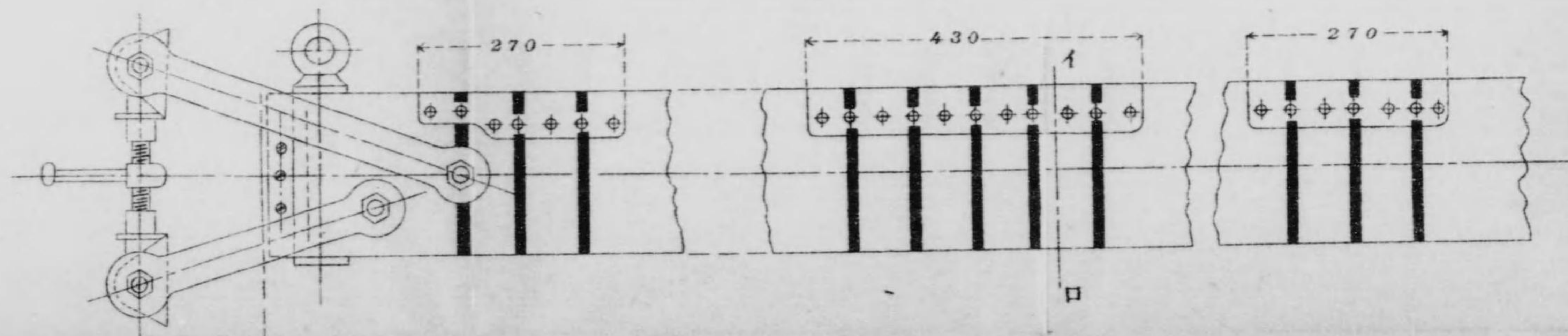


圖 一 十 二 第

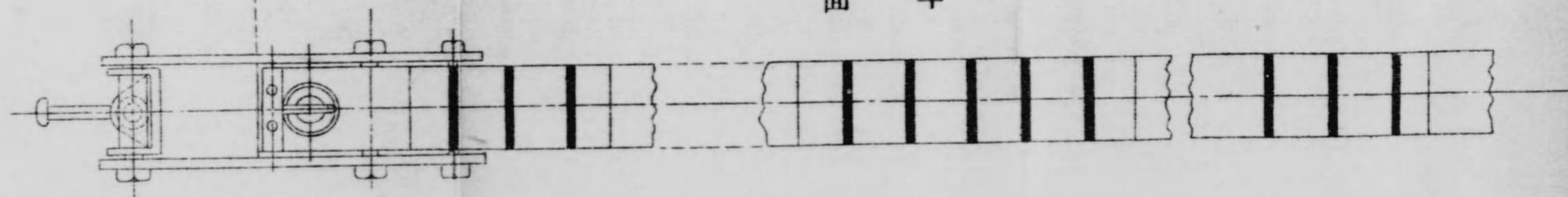


欠

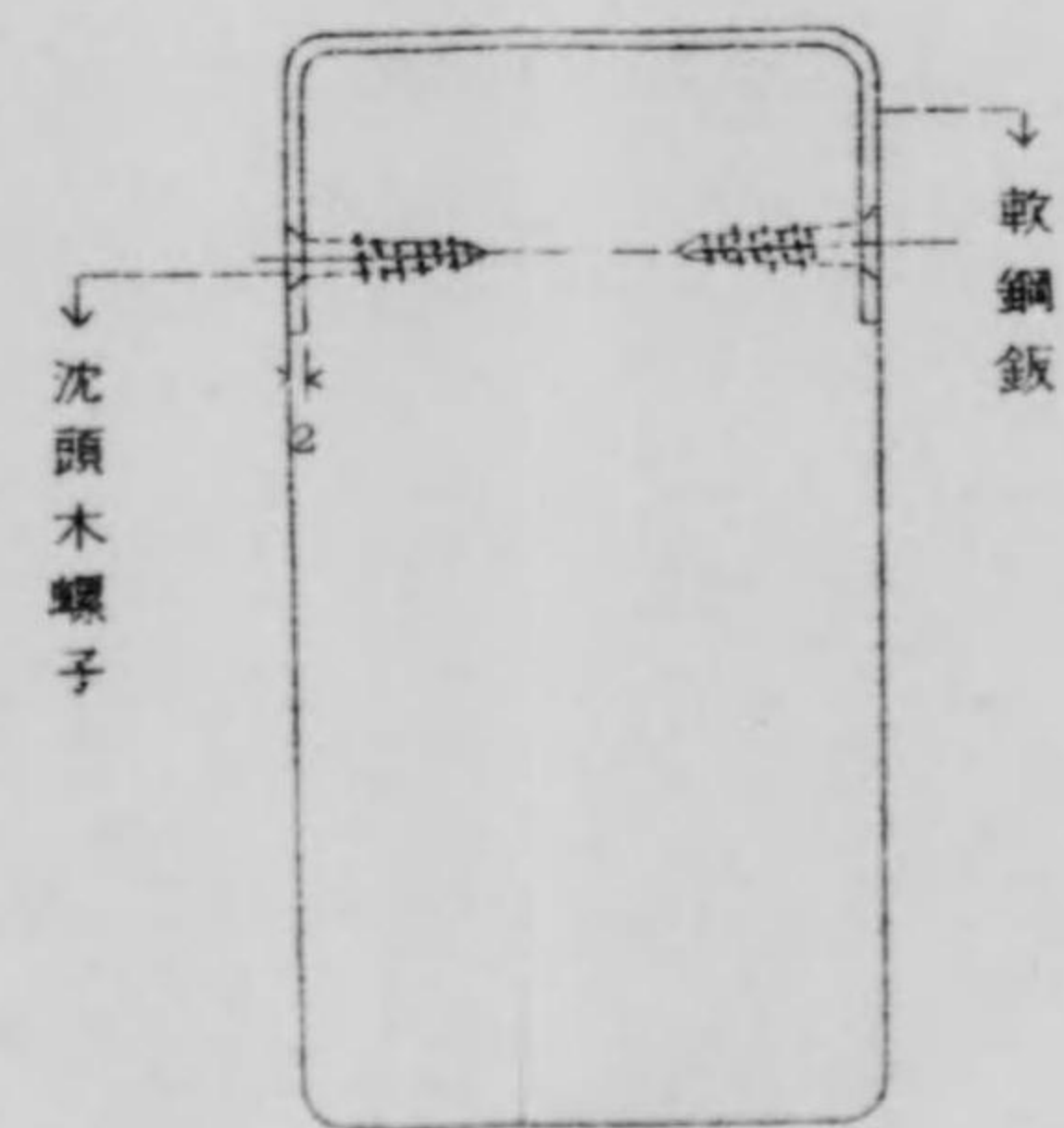
圖 八 十 二 第
理 修 / 材 冠
面 側



面 平



面 斷 口 1



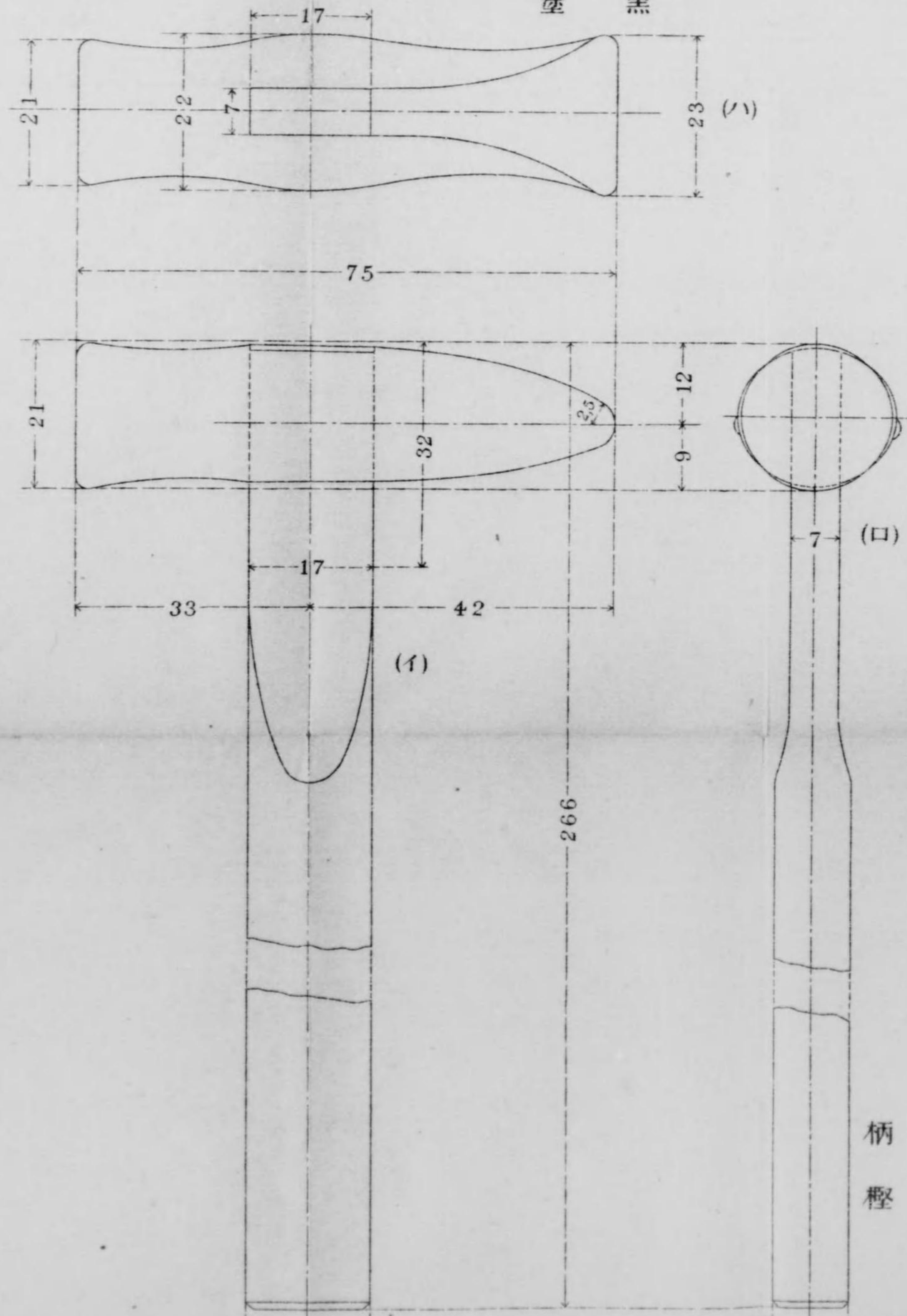
圖九十二第

鉋上仕小

鋼 硬

淬健面打端兩

塗 黑

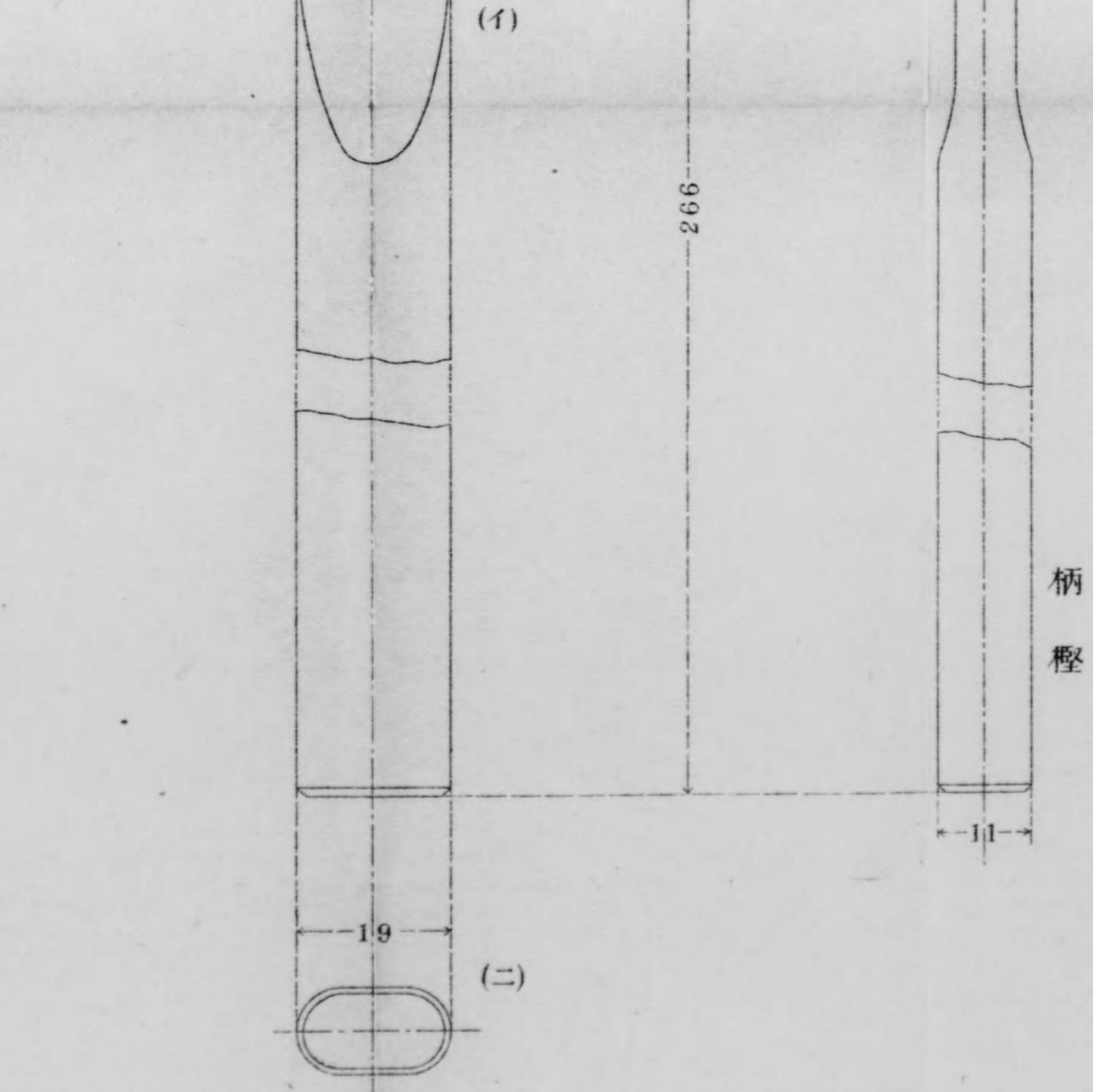
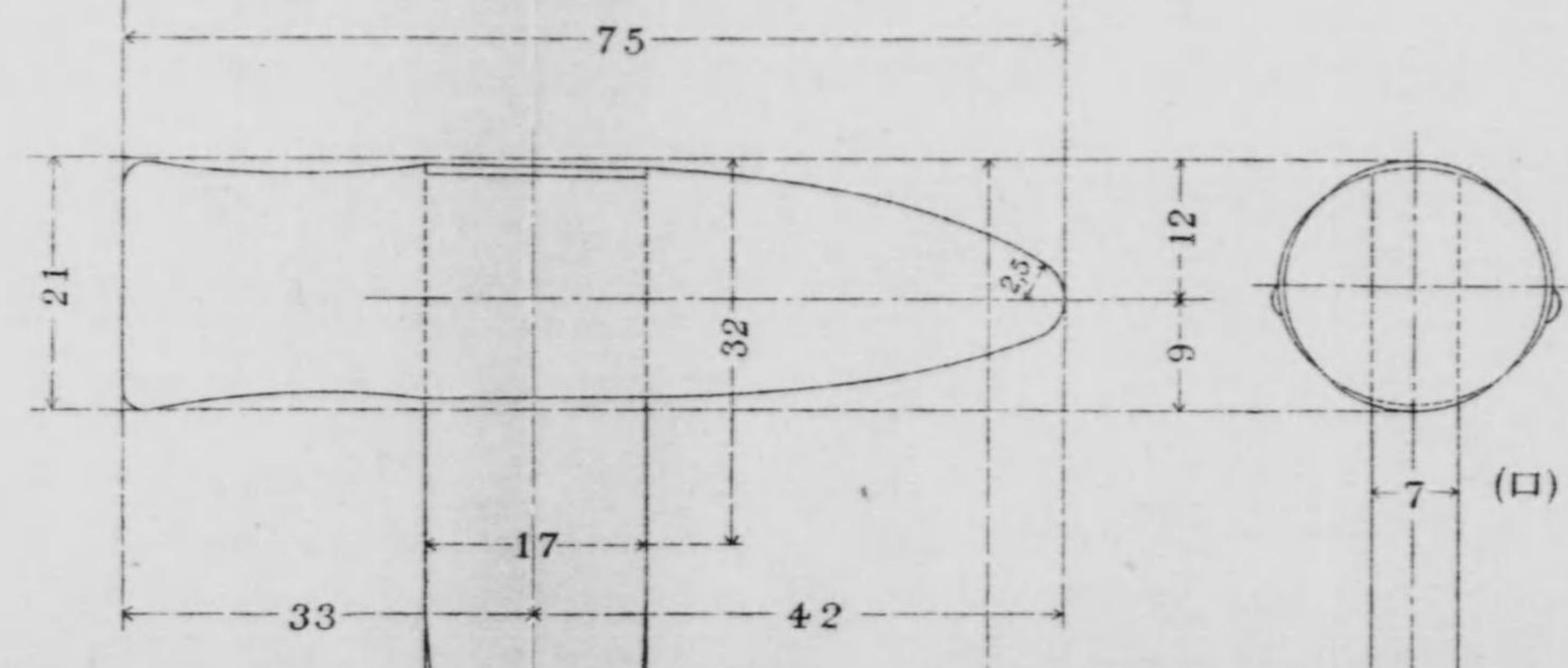
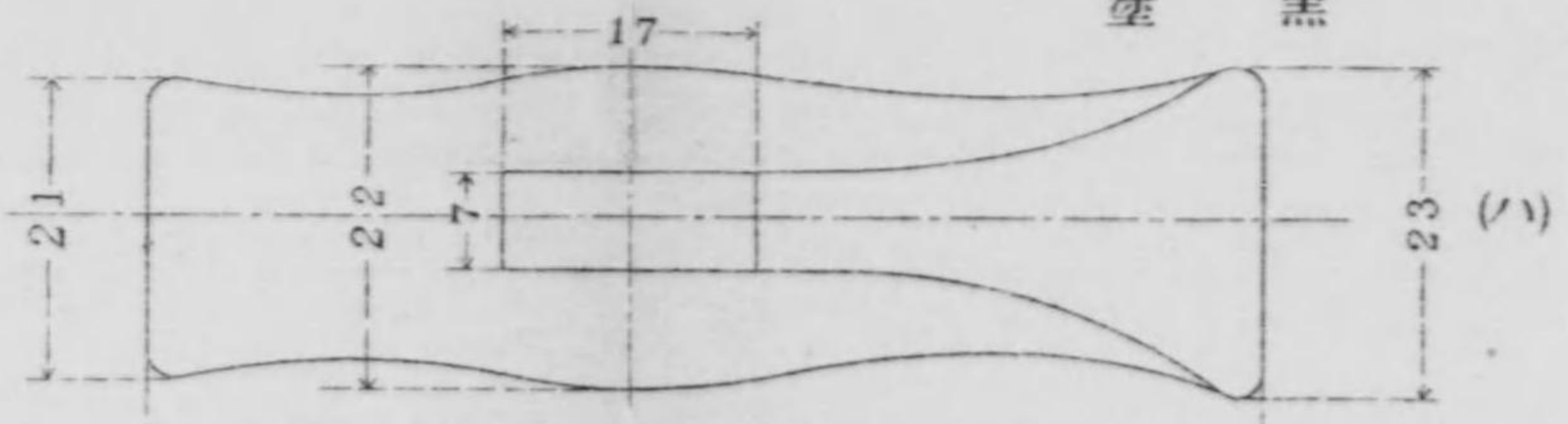


- (イ) ハ小仕上鉋ヲ横ヨリ見タル圖
- (ロ) ハ之ヲ左側方ヨリ見タル圖
- (ハ) ハ之ヲ上方ヨリ見タル圖
- (二) ハ柄ヲ下方ヨリ見タル圖

柄
徑

兩端打健面淨

塗 黑



- (イ) 小仕上 鍔ヲ横ヨリ見タル圖
- (ロ) ハ之ヲ左側方ヨリ見タル圖
- (ハ) ハ之ヲ上方ヨリ見タル圖
- (ニ) ハ柄ヲ下方ヨリ見タル圖

柄 脛

大正六年九月七日 印刷
大正六年九月十日 發行

(木工教程 附)
(定價金貳拾錢)

翻刻
發行者

東京市麴町區隼町四番地

兵用圖書株式會社

印刷者

東京市麴町區隼町四番地

代表者 小林 又七

陸軍省
檢閱濟

印刷所

陸軍省構內

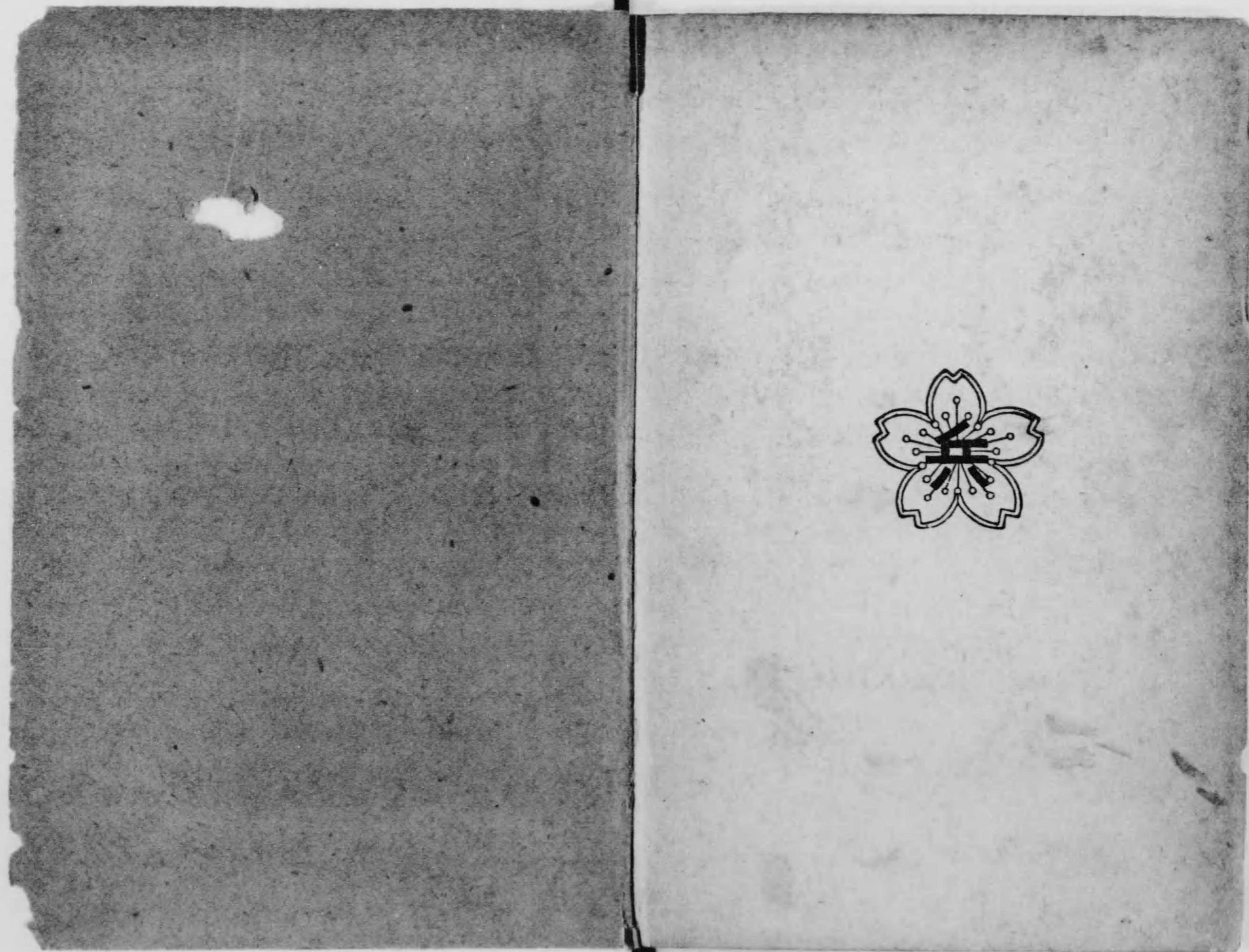
小林 出張所
電話新橋九四一番

兵用圖書株式會社

東京市麴町區隼町四番地

兵用圖書株式會社

電話特番町三七七四番
振替東京一八〇八八番



364
267

終

